

令和4年度
県内事業者のデジタル技術活用実態調査
報告書

令和5年3月
秋田県産業労働部産業政策課
デジタルイノベーション戦略室

目次

| | | |
|-----|--|----|
| I | 調査の概要 | 2 |
| II | 調査の結果 | 16 |
| A | 調査結果の概要 | 17 |
| B | 定量調査（アンケート調査） | 22 |
| Q 2 | 経営課題とデジタル技術による対応状況 | 22 |
| ○ | 経営課題の重要度合 [Q 2-1] | 22 |
| ○ | 経営課題に対するデジタル技術での対応状況 [Q 2-2] | 23 |
| ○ | 重要な経営課題におけるデジタル技術での対応状況 [Q 2-1×Q 2-2] | 24 |
| Q 3 | デジタル技術活用の現状 | 25 |
| ○ | 活用しているデジタル技術 [Q 3-1] | 25 |
| ○ | デジタル技術活用の満足度 [Q 3-2] | 27 |
| ○ | デジタル技術の1年あたりの費用 [Q 3-3] | 29 |
| ○ | デジタル技術活用における発注先 [Q 3-4] | 31 |
| ○ | デジタル技術の導入・運用における問題点 [Q 3-5] | 32 |
| Q 4 | 今後のデジタル技術の活用に関する意向・課題等 | 33 |
| ○ | デジタル技術活用に関する今後の方針 [Q 4-1~2] | 33 |
| ○ | 今後のデジタル技術導入の目的 [Q 4-3] | 35 |
| ○ | 関心のあるデジタル技術 [Q 4-4] | 36 |
| ○ | 今後のデジタル技術導入・運用における問題および投資可能額 [Q 4-5~6] | 37 |
| Q 5 | DX（デジタルトランスフォーメーション）について | 38 |
| ○ | DXの認知度と考え [Q 5-1~2] | 38 |
| Q 6 | デジタル人材の確保・育成状況 | 40 |
| ○ | システム担当部署有無および担当者人数 [Q 6-1] | 40 |
| ○ | 取組を総括できる人材／企画・導入・運用できる人材 [Q 6-2] [Q 6-3] | 41 |
| ○ | デジタル人材の確保手段 [Q 6-4] | 42 |
| Q 7 | 情報セキュリティ対策の状況 | 43 |
| ○ | I P A「情報セキュリティ5か条」の実施状況 [Q 7-1] | 43 |
| ○ | 関心があるセキュリティ対策サービス [Q 7-2] | 44 |
| ○ | この1年以内でのセキュリティ被害 [Q 7-3] | 45 |
| Q 8 | 電子契約への対応状況 | 46 |
| ○ | 電子契約の導入状況 [Q 8-1~2] | 46 |
| Q 9 | デジタル技術活用に関する支援 | 47 |
| ○ | デジタル技術関連での相談者 [Q 9-1] | 47 |
| ○ | 県の支援制度 [Q 9-2] | 48 |
| ○ | デジタル技術活用で関心があるテーマ [Q 9-3] | 49 |
| ○ | 行政への要望等 [Q 9-4] | 50 |
| C | 定性調査（ヒアリング調査） | 51 |
| 1 | ヒアリングの方針 | 51 |
| 2 | ヒアリングの結果 | 51 |

I 調査の概要

I 調査の目的

本調査は、県内中小企業・小規模企業者におけるデジタル技術の活用状況やDX（デジタル・トランスフォーメーション）に対する考え方を把握し、県内産業のデジタル化およびDXの推進に向けた施策の方向性や具体的な事業の検討に活用することを目的に行った。

II 調査の時期

1 定量調査（アンケート調査）

各事業所の状況は、令和4年6月末日現在で実施した。調査票は7月に発送、回収した。

2 定性調査（ヒアリング調査）

令和4年11月から令和5年3月までに、職員が企業訪問をしてヒアリングを実施した。

III 調査の対象

1 定量調査（アンケート調査）

平成28年経済センサスによると、県内に本社（本所）がある企業（法人・個人経営）および単独事業所は約36,000社。その中から、地域および業種間の偏りについて補正した上で1,737社を無作為抽出した。

2 定性調査（ヒアリング調査）

業種や従業員数を考慮した上で事業者を選定してヒアリングを実施したほか、県内情報関連企業や商工団体へのヒアリングを実施した。

IV 調査の項目

1 事業所の現況

- ① 事業所名、② 所在地、③ 代表者名、④ 代表者年齢、⑤ 創業年、⑥ 直近期の売上高、⑦ 従業員数（正社員・正社員以外）、⑧ 業種

2 経営課題とデジタル技術による対応状況

- ・ 経営課題の重要度合 [Q2-1]
- ・ 経営課題に対するデジタル技術での対応状況 [Q2-2]

3 デジタル技術活用の現状

- ・ 活用しているデジタル技術 [Q3-1]
- ・ デジタル技術活用の満足度 [Q3-2]
- ・ デジタル技術活用の費用 [Q3-3]
- ・ デジタル技術活用における発注先 [Q3-4]
- ・ デジタル技術の導入・運用での問題 [Q3-5]

4 今後のデジタル技術の活用に関する意向・課題等

- ・ デジタル技術活用に関する今後の方針 [Q4-1]
- ・ デジタル技術の導入・検討の予定がない理由 [Q4-2]
- ・ 今後のデジタル技術導入の目的 [Q4-3]

- ・ 関心があるデジタル技術 [Q 4-4]
- ・ 今後のデジタル技術導入・運用での問題 [Q 4-5]
- ・ 今後のデジタル技術導入における投資可能額 [Q 4-6]
- 5 DX (デジタルトランスフォーメーション) について
 - ・ DXの認知度 [Q 5-1]
 - ・ DXについての考え [Q 5-2]
- 6 デジタル人材の確保・育成状況
 - ・ システム担当部署および担当者数 [Q 6-1]
 - ・ デジタル化の取り組みを総括できる人材 [Q 6-2]
 - ・ ITツール・システムを企画・導入・運用できる人材 [Q 6-3]
 - ・ デジタル人材の確保手段 [Q 6-4]
- 7 情報セキュリティ対策の状況
 - ・ IPA「情報セキュリティ5か条」の実施状況 [Q 7-1]
 - ・ 関心があるセキュリティ対策サービス [Q 7-2]
 - ・ この1年以内でのセキュリティ被害 [Q 7-3]
- 8 電子契約への対応状況
 - ・ 電子契約の導入状況 [Q 8-1]
 - ・ 電子契約についての今後の考え [Q 8-2]
- 9 デジタル技術活用に関する支援
 - ・ デジタル技術関連での相談者 [Q 9-1]
 - ・ 県の支援制度の認知度 [Q 9-2]
 - ・ デジタル技術活用で関心があるテーマ [Q 9-3]
 - ・ 行政への要望等 [Q 9-4]

V 調査の方法

1 定量調査 (アンケート調査)

調査対象事業所に調査票を送付し、回答用Webページで回答する方法と、調査票に回答を記入後に返送してもらう方法を併用した。

2 定性調査 (ヒアリング調査)

県デジタルイノベーション戦略室の職員が、事業所を訪問し、ヒアリングを行った。

VI 集計方法

アンケートの回答の集計は、(株)東京商工リサーチ社内にて行い、ペリファイ入力にて対応した。その後、県が単純集計のほか、一部設問で、業種（下表のとおり）、従業員数、地域（県北、県央、県南）によりクロス集計を実施した。

| 業種（クロス分析） | 業種（調査項目1-⑧） |
|-----------|-------------|
| 製造業 | 製造業 |
| 卸売業・小売業 | 卸売業・小売業 |
| 建設業 | 建設業 |
| 医療福祉 | 医療、福祉 |
| サービス業その他 | 上記以外 |

VII 回収の状況

| 区分 | | 抽出事業者数 | | 回収事業者数 | |
|-------------------|---------------|--------|--------|--------|--------|
| | | | 構成比 | | 構成比 |
| 調査計 | | 1737 | 100.0% | 360 | 100.0% |
| 地域 | 県北 | 394 | 22.7% | 83 | 23.1% |
| | 県央 | 795 | 45.8% | 161 | 44.7% |
| | 県南 | 548 | 31.5% | 116 | 32.2% |
| 年商 | 1000万円未満 | | | 67 | 18.6% |
| | 1000~5000万円未満 | | | 77 | 21.4% |
| | 5000~1億円未満 | | | 45 | 12.5% |
| | 1~3億円未満 | | | 78 | 21.7% |
| | 3~5億円未満 | | | 25 | 6.9% |
| | 5~10億円未満 | | | 17 | 4.7% |
| | 10億円以上 | | | 31 | 8.6% |
| | 未入力 | | | 20 | 5.6% |
| 従業員数 | 1~4名 | | | 159 | 44.2% |
| | 5~9名 | | | 40 | 11.1% |
| | 10~19名 | | | 62 | 17.2% |
| | 20~49名 | | | 52 | 14.4% |
| | 50~99名 | | | 27 | 7.5% |
| | 100名以上 | | | 8 | 2.2% |
| | 未入力 | | | 12 | 3.3% |
| | 業種 | 農業、林業 | 29 | 1.7% | 10 |
| 漁業 | | 1 | 0.1% | | |
| 鉱業、採石業、砂利業 | | 1 | 0.1% | 1 | 0.3% |
| 建設業 | | 239 | 13.8% | 39 | 10.8% |
| 製造業 | | 143 | 8.2% | 41 | 11.4% |
| 電気・ガス熱供給・水道業 | | 2 | 0.1% | 4 | 1.1% |
| 情報通信業 | | 7 | 0.4% | 1 | 0.3% |
| 運輸業、郵便業 | | 23 | 1.3% | 8 | 2.2% |
| 卸売業・小売業 | | 423 | 24.4% | 65 | 18.1% |
| 金融業・保険業 | | 12 | 0.7% | 2 | 0.6% |
| 不動産業、物品賃貸業 | | 67 | 3.9% | 12 | 3.3% |
| 学術研究専門・技術サービス業 | | 59 | 3.4% | 6 | 1.7% |
| 宿泊業、飲食サービス業 | | 221 | 12.7% | 44 | 12.2% |
| 生活関連サービス業、娯楽業 | | 231 | 13.3% | 24 | 6.7% |
| 教育、学習支援業 | | 37 | 2.1% | 15 | 4.2% |
| 医療、福祉 | | 112 | 6.4% | 37 | 10.3% |
| 複合サービス業 | | 6 | 0.3% | 2 | 0.6% |
| サービス業（他に分類されないもの） | | 124 | 7.1% | 42 | 11.7% |
| 未入力 | | 0 | 0.0% | 7 | 1.9% |

VIII 調査への協力依頼文

令和4年7月

各位

秋田県産業労働部産業政策課
デジタルイノベーション戦略室長

「県内事業者のデジタル技術活用実態調査」への御協力をお願い

平素より、本県産業振興施策の推進につきましては、格別の御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。さて、県では、地域産業のデジタル化及びDX（デジタル・トランスフォーメーション）の推進に向けた施策方針等を検討するため、県内中小企業・小規模事業者のデジタル技術活用実態調査を実施します。つきましては、御多忙のところ誠に恐縮ですが、以下の記載事項に基づき御回答くださいますようお願いいたします。

【アンケート調査概要】

- ・このアンケート調査は、県内の中小企業・小規模事業者を対象に無作為抽出により1,800事業所を選定しております。
- ・アンケート調査票は、オンライン又は郵送により、令和4年8月10日（水）まで、御回答ください。
- ・オンライン回答の場合は、次のURL又は2次元コードから御回答ください。

<オンライン回答ページURL>

<https://tsr-net.com/202207-akita>



- ・郵送回答の場合は、同封の返信用封筒により調査票を返送してください。（送り状等は不要）
- ・なお、アンケート調査票回収後、調査結果を踏まえて定性的な調査を行うため、訪問によるヒアリングをお願いする場合がございますので、併せて御協力ください。

【回答の際の注意点】

- ・令和4年6月末現在の状況を御記入ください。

【送付書類】

- ・依頼文書（本資料）
- ・アンケート調査票
- ・返信用封筒
- ・支援事業のご案内

【御回答いただいたアンケート調査票の取扱いについて】 必ずお読みください

本アンケート調査で御回答いただきました情報は、統計的に集計・分析するとともに事業者支援に利用させていただきます。個別の情報がこれらの目的以外で利用されることはありません。また、個人情報については、「秋田県個人情報保護条例」に基づき適切に管理します。

【お問い合わせ先】

秋田県産業労働部産業政策課デジタルイノベーション戦略室
TEL：018-860-2245 E-mail：digital@pref.akita.lg.jp

県内事業者のデジタル技術活用実態調査 調査票

※マークがついた用語は、最終ページに説明があります

1 貴社の基本情報について

| | | | | | |
|----------------|------|---|-------------|-------------|---|
| ふりがな | | | | | |
| 名称 (商号) | | | | | |
| 所在地 (住所) | 〒 | - | | | |
| | | | | | |
| ふりがな | | | | 代表者 年 齢 | 歳 |
| 代表者名 | | | | | |
| 創業年 | 西暦 | 年 | 直近期の 売上高 | 万円 | |
| 従業員数 (役員除く) | 正社員 | 名 | 正社員以外 | 名 | |
| 記入担当者 | 部署名 | | | 氏名 | |
| | 電話番号 | | | メール アドレス | |

○ 業種について、最も売上高が大きいもの1つを選択して○をつけてください。

| | | |
|----------------|------------------|----------------------|
| 1：農業、林業 | 2：漁業 | 3：鉱業、採石業、砂利採取業 |
| 4：建設業 | 5：製造業 | 6：電気・ガス熱供給・水道業 |
| 7：情報通信業 | 8：運輸業、郵便業 | 9：卸売業・小売業 |
| 10：金融業・保険業 | 11：不動産業、物品賃貸業 | 12：学術研究専門・技術サービス業 |
| 13：宿泊業、飲食サービス業 | 14：生活関連サービス業、娯楽業 | 15：教育、学習支援業 |
| 16：医療、福祉 | 17：複合サービス業 | 18：サービス業(他に分類されないもの) |

2 貴社の経営課題とデジタル技術による対応状況について

Q2-1 以下の経営課題について、貴社における重要度合をお答えください。

【5:非常に重要である 4:やや重要である 3:どちらでもない 2:あまり重要でない 1:全く重要でない】

※回答は、項目ごとにそれぞれ一つ〇をつけてください。

| 経営課題 | | 重要度合 | | | | |
|------|------------------------|------|---|---|---|---|
| 1 | 売上拡大（販路開拓、高付加価値化） | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2 | コスト削減（生産コスト、事務コスト） | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3 | 生産性向上・事務効率化 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4 | 工期・納期の管理・短縮 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 | 品質管理・品質向上（製品・サービスの向上） | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6 | 新事業（新製品・新サービスの開発） | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7 | 人手不足 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8 | 人材育成（技術向上・技術継承） | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9 | 事業承継（後継者） | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10 | 働き方改革 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11 | 財務関連（資金繰り、新事業・設備投資） | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12 | 企業信頼の向上（CSR、リスクマネジメント） | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13 | その他（ ） | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

Q2-2 以下の経営課題について、貴社におけるデジタル技術の対応状況をお答えください。

【3:対応済(一部対応済含む) 2:対応中・検討中 1:未対応 0:デジタル技術で対応できることを知らない】

※回答は、項目ごとにそれぞれ一つ〇をつけてください。

| 経営課題 | | 対応状況 | | | |
|------|------------------------|------|---|---|---|
| 1 | 売上拡大（販路開拓、高付加価値化） | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | コスト削減（生産コスト、事務コスト） | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | 生産性向上・事務効率化 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | 工期・納期の管理・短縮 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 品質管理・品質向上（製品・サービスの向上） | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 6 | 新事業（新製品・新サービスの開発） | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 7 | 人手不足 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 8 | 人材育成（技術向上・技術継承） | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 9 | 事業承継（後継者） | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 10 | 働き方改革 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 11 | 財務関連（資金繰り、新事業・設備投資） | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 12 | 企業信頼の向上（CSR、リスクマネジメント） | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 13 | その他（ ） | 3 | 2 | 1 | 0 |

3 貴社でのデジタル技術活用の現状について

Q3-1 活用しているデジタル技術について、当てはまるもの全てに☑をつけてください。

| | |
|------------|--|
| 〔ネットワーク〕 | <input type="checkbox"/> 社内LAN ^{※1} <input type="checkbox"/> インターネット（有線） <input type="checkbox"/> インターネット（無線※Wifi等） |
| 〔汎用ソフトウェア〕 | <input type="checkbox"/> オフィスツール ^{※2} (Word, Excel等) <input type="checkbox"/> 電子メール <input type="checkbox"/> グループウェア ^{※3} <input type="checkbox"/> BIツール ^{※4} |
| 〔業務ソフトウェア〕 | <input type="checkbox"/> 税務会計システム <input type="checkbox"/> 人事給与システム <input type="checkbox"/> 顧客管理システム <input type="checkbox"/> 販売管理システム <input type="checkbox"/> 生産管理システム <input type="checkbox"/> 購買管理システム <input type="checkbox"/> ERP(基幹業務統合システム) <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> ECサイト ^{※5} <input type="checkbox"/> RPA ^{※6} <input type="checkbox"/> IoT ^{※7} <input type="checkbox"/> AI ^{※8} <input type="checkbox"/> キャッシュレス決済 <input type="checkbox"/> その他（ ） |

Q3-2 デジタル技術の活用に対する満足度について、当てはまる番号1つを選択してください。
また、その理由について当てはまるもの全てに☑をつけてください。

| | | |
|---|---|---------------|
| 5 : 大変満足している | 4 : やや満足している | 3 : どちらともいえない |
| 2 : あまり満足していない | 1 : 全く満足していない | |
| (理由) | | |
| <input type="checkbox"/> 売上拡大への影響の有無 | <input type="checkbox"/> コスト削減への影響の有無 | |
| <input type="checkbox"/> 生産性向上・事務効率化への影響の有無 | <input type="checkbox"/> 工期・納期の管理・短縮への影響の有無 | |
| <input type="checkbox"/> 品質管理・品質向上への影響の有無 | <input type="checkbox"/> 新事業創出への影響の有無 | |
| <input type="checkbox"/> 人材育成への影響の有無 | <input type="checkbox"/> 顧客満足度向上への影響の有無 | |
| <input type="checkbox"/> 人手不足解消への影響の有無 | <input type="checkbox"/> 事業承継への影響の有無 | |
| <input type="checkbox"/> 働き方改革への影響の有無 | <input type="checkbox"/> 企業信頼の向上への影響の有無 | |
| <input type="checkbox"/> その他（ ） | | |

Q3-3 Q3-1で選択したデジタル技術の1年あたりの費用について、当てはまる番号1つを選択してください。

| | | |
|-------------------|-------------------|------------------|
| 1 : 10万円未満 | 2 : 10万円～50万円未満 | 3 : 50万円～100万円未満 |
| 4 : 100万円～300万円未満 | 5 : 300万円～500万円未満 | 6 : 500万円以上 |

Q3-4 デジタル技術を活用している場合、その発注先は、県内の業者ですか。それとも県外の業者ですか。
当てはまる番号1つを選択してください。

| | | |
|--------|--------|-----------------------|
| 1 : 県内 | 2 : 県外 | 3 : 両方（県内：県外比率 % : %） |
|--------|--------|-----------------------|

Q3-5 デジタル技術を活用している場合、その導入や運用にあたり、問題となったもの全てに☑をつけてください。

| | | | | |
|------------------------------------|---------------------------------------|-------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 費用 | <input type="checkbox"/> 業者選定 | <input type="checkbox"/> 製品選定 | <input type="checkbox"/> 業者等のフォロー | <input type="checkbox"/> 従業員のスキル不足 |
| <input type="checkbox"/> 社内業務との整合性 | <input type="checkbox"/> 運用負担（作業量、費用） | | | <input type="checkbox"/> 情報セキュリティ |
| <input type="checkbox"/> その他（ ） | | | <input type="checkbox"/> 特になし | |

5 DX（デジタル・トランスフォーメーション）^{*9}について

DX（デジタル・トランスフォーメーション）とは、企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革することです。昨今、国や県では、DXの推進をしていますが、貴社の状況を教えてください。

Q5-1 DXについてご存知ですか？ 当てはまる番号1つを選択してください。

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1：良く知っている | 2：聞いたことがあり、関心がある |
| 3：聞いたことがあるが、関心はない | 4：知らない、聞いたことがない |

Q5-2 DXについて、今後どのようにお考えですか？ 当てはまる番号1つを選択してください。

- | | | |
|---------------|--------------|-------------------|
| 1：積極的に取り組みたい | 2：段階的に取り組みたい | 3：必要と思うが取り組む予定はない |
| 4：現状は必要とっていない | 5：よく分からない | |

6 デジタル人材^{*10}の確保・育成状況について

自社内でデジタル化やDXを進めるためには、社内でデジタル化やDXを推進する「デジタル人材」がいることが重要です。デジタル人材の確保・育成状況について、貴社の状況を教えてください。

Q6-1 今現在、貴社内にはシステムを担当する部署はありますか。また、担当者は何名ですか（兼務も含む）。

- | | | | | | | |
|--------|------|------|------|------|------|--------|
| 〔担当部門〕 | 1：ある | 2：ない | | | | |
| 〔担当人数〕 | 1：0名 | 2：1名 | 3：2名 | 4：3名 | 5：4名 | 6：5名以上 |

Q6-2 デジタル化の取組全体を統括できる人材について、当てはまる番号1つを選択してください。

- | | | | |
|-------------|---------------|------------|------------|
| 1：十分確保できている | 2：ある程度確保できている | 3：確保できていない | 4：自社には必要ない |
|-------------|---------------|------------|------------|

「1：十分確保できている」または「2：ある程度確保できている」と回答いただいた方に伺います。

その人材が所属する部署について、当てはまる番号1つを選択してください。

- | | | |
|-------|----------|----------------|
| 1：経営層 | 2：システム部門 | 3：その他営業部や製造部など |
|-------|----------|----------------|

Q6-3 ITツール・システムを企画・導入・運用できる人材について、当てはまる番号1つを選択してください。

- | | | | |
|-------------|---------------|------------|------------|
| 1：十分確保できている | 2：ある程度確保できている | 3：確保できていない | 4：自社には必要ない |
|-------------|---------------|------------|------------|

「1：十分確保できている」または「2：ある程度確保できている」と回答いただいた方に伺います。

その人材が所属する部署について、当てはまる番号1つを選択してください。

- | | | |
|-------|----------|----------------|
| 1：経営層 | 2：システム部門 | 3：その他営業部や製造部など |
|-------|----------|----------------|

Q6-4 デジタル人材の確保の手段について、当てはまるもの全てに☑をつけてください。

- | | | |
|---|--------------------------------|--|
| <input type="checkbox"/> 新卒採用（ <input type="checkbox"/> 大卒・大学院卒 <input type="checkbox"/> 専門学校卒 <input type="checkbox"/> 高卒） | <input type="checkbox"/> 経験者採用 | <input type="checkbox"/> 既存社員の育成 |
| <input type="checkbox"/> その他（ | | <input type="checkbox"/> デジタル人材としての採用はない |

9 デジタル技術活用に関する支援について

Q9-1 貴社のデジタル技術関連での相談者について、当てはまるもの全てに☑をつけてください。

- | | |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 取引のある情報関連企業 | <input type="checkbox"/> 製品の購入販売店（ショップ・量販店等） |
| <input type="checkbox"/> オフィス機器等のディーラー | <input type="checkbox"/> 県・市町村 |
| <input type="checkbox"/> 商工団体等企業支援機関 | <input type="checkbox"/> 取引のある金融機関 |
| <input type="checkbox"/> 取引のある会計士・税理士等 | <input type="checkbox"/> デジタル技術関連以外での取引先 |
| <input type="checkbox"/> プライベートでの友人・知人 | <input type="checkbox"/> 社外に相談者はおらず、自社で決定 |
| <input type="checkbox"/> その他（ | <input type="checkbox"/> 特にいない |

Q9-2 県によるデジタル技術活用に関する支援制度について、当てはまる番号1つを選択してください。

- | | |
|---------|--------------------------|
| 1：知っている | 2：知らない（支援情報の案内を同封しております） |
|---------|--------------------------|

Q9-3 関心がある分野について、当てはまるもの全てに☑をつけてください。

- | | | | |
|---|---|---|---|
| <input type="checkbox"/> クラウド | <input type="checkbox"/> I o T | <input type="checkbox"/> A I | <input type="checkbox"/> ビッグデータ |
| <input type="checkbox"/> ロボット | <input type="checkbox"/> R P A | <input type="checkbox"/> デジタルマーケティング | <input type="checkbox"/> フィンテック |
| <input type="checkbox"/> ドローン | <input type="checkbox"/> 5 G ^{*14} | <input type="checkbox"/> V R ^{*15} ・A R ^{*16} | <input type="checkbox"/> オープンデータ ^{*17} |
| <input type="checkbox"/> SNS（Facebook、Twitter、Instagram等） | | | |
| <input type="checkbox"/> その他（ | | | |
| <input type="checkbox"/> 特になし | | | |

Q9-4 デジタル技術活用推進に関する行政への要望等について、当てはまるもの全てに☑をつけてください。
また、その他要望等を自由に記載してください。

- | | | |
|---|----------------------------------|--------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 情報提供（Webサイト、メール） | <input type="checkbox"/> セミナー開催 | <input type="checkbox"/> 相談体制の強化 |
| <input type="checkbox"/> 人材育成支援の強化 | <input type="checkbox"/> 技術支援の強化 | <input type="checkbox"/> 補助金等財政支援の強化 |
| <input type="checkbox"/> その他（ | | |

※自由に記載してください。

Q9-5 デジタル化支援のための事業等の情報提供を希望しますか。

- | | |
|--|--------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 希望する | <input type="checkbox"/> 希望しない |
| 希望する場合の連絡先 → <input type="checkbox"/> 基本情報に記載の担当者メールアドレス宛を希望 | |
| <input type="checkbox"/> 次のメールアドレス宛を希望（ | |

御協力ありがとうございました。

アンケート調査の用語説明

| No. | 用語 | 説明 |
|-----|----------------------------------|--|
| 1 | 社内LAN | 社内の建物内やフロア内といった狭い範囲にあるコンピュータで構成されたネットワークのこと。 |
| 2 | オフィスツール | ワープロ、表計算、プレゼンテーションの各アプリケーション。マイクロソフト製のWordやExcelなど。 |
| 3 | グループウェア | 企業など組織内のコンピュータネットワークを活用した情報共有のためのシステムソフトウェア。 |
| 4 | BI (Business Intelligence) ツール | BIは、ビジネスの意思決定に関わる情報のこと。BIツールは、意思決定に利用するためにデータを収集・分析し、その結果をグラフや図表でわかりやすく表現するためのツール。 |
| 5 | EC (Electronic Commerce) サイト | ECは、電子商取引を意味する。ECサイトでは、パソコンやスマホ、タブレットなどのデバイスから注文を行うことで商品やサービスを売買できる。 |
| 6 | RPA (Robotic Process Automation) | デスクワーク（主に定型作業）を、パソコンの中にあるソフトウェア型のロボットが代行・自動化する概念を指す。 |
| 7 | IoT(Internet of Things) | モノのインターネットを意味する。あらゆるモノがインターネットを通じて接続され、モニタリングやコントロールを可能にするといった概念のこと。 |
| 8 | AI (Artificial Intelligence) | 人工知能を意味する。人間の脳が行っている知的な作業をコンピュータで模倣したソフトウェアやシステム。音声認識や画像認識、故障予知や来客・売上予測など様々な活用方法がある。 |
| 9 | DX (Digital Transformation) | デジタル・トランスフォーメーションの略で、企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること。 |
| 10 | デジタル人材 | デジタル技術に関する基礎的な知識を有し、デジタル技術を活用して、企業に新たな価値を生み出す人材。 |
| 11 | DoS (Denial of Services) 攻撃 | サーバやネットワークなどに大量アクセス等により過剰な負荷をかけたり、脆弱性をついたりし、サービスを妨害するサイバー攻撃。 |
| 12 | 電子契約 | 情報通信技術を利用し、電子ファイルに対して電子データ（電子署名・タイムスタンプ等）を記録して締結する契約のこと。 |
| 13 | 電子署名 | 電子文書が原本であること・改ざんされていないことを電子証明書を用いて証明すること。紙文書における印鑑やサインに相当する。 |
| 14 | 5G (5th Generation) | 携帯電話などに用いられる通信規格で、現在主流である4Gに続く次世代（第5世代）の移動通信システム。超高速、超低遅延、多数同時接続を特徴とする。 |
| 15 | VR (Virtual Reality) | 仮想現実のこと。現実にはない世界又は体験し難い状況をコンピュータグラフィックによって仮想空間上に作り出す。 |
| 16 | AR (Augmented Reality) | 拡張現実のこと。コンピュータを使い現実世界の中に仮想の情報を重ね合わせる技術。 |
| 17 | オープンデータ | 国、地方公共団体及び事業者が保有する官民データのうち、国民の誰もがインターネット等を通じて容易に利用（加工、編集、再配布等）できるよう、公開されたデータ。 |

II 調査の結果

A 調査結果の概要

- ① 税務会計システムや人事給与システムの活用など、個別業務のデジタル化は前回調査（2019年）より進んでいる

【アンケート調査結果】

税務会計システム（61.1%/2019年比30.6%増）や人事給与システム（42.8%/2019年比21.2%増）など、個別の業務システムを活用している割合は、前回調査（2019年）より増加している。IoTやAI等の先進技術を活用する事業者の割合は、IoT、AIともに1%台であった。

【ヒアリング調査結果】

デジタル技術の活用については、次のような声があった。

- ・ 税理士からの案内やインボイス制度への対応を見据えて税務会計システムを導入した。
- ・ グループウェアやコミュニケーションツールは、サブスクリプション型のサービス（定期的に料金を支払い利用するサービス）の普及により活用しやすくなった。

【今後の対応】

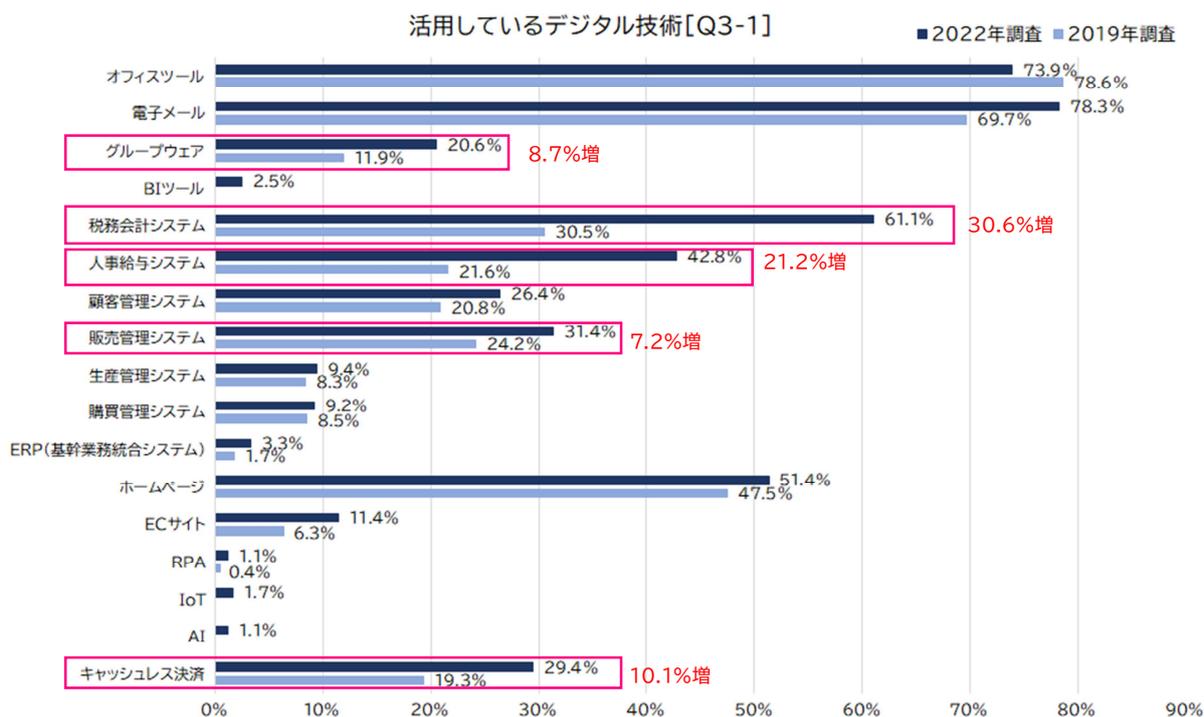
個別の業務システムを活用している割合は、前回調査（2019年）より増加しており、個別業務のデジタル化は進んでいる。

一方で、IoTやAI等の活用については、国が実施した調査^{※1}に比べ低い結果となっている。

2023年10月にスタートするインボイス制度に対応するため、税務会計システムを導入した事例もあり、会計などの事業者身近な業務のデジタル化を通し、その効果を実感してもらうことが普及啓発の手法として効果的と思われる。

県では、商工団体等と連携し、身近な業務におけるデジタル技術の活用を促し、県内事業者のデジタル化を更に進めていく。

※1：財務局による先端技術（IoT、AI等）の活用状況（2018年11月）に関する調査では、中堅・中小企業の活用状況は、IoTが15.7%、AIが5.6%であった。



② 経営課題（売上拡大やコスト削減等）の解決手段としてデジタル技術を活用できていない事業者が依然として多い

【アンケート調査結果】

「非常に重要である」「やや重要である」とする経営課題は、次のとおりであった。

- ・ 生産性向上・事務効率化 71.1%（2019年比5.2%増）
- ・ 売上拡大（販路開拓・高付加価値化） 70.8%（2019年比2.5%減）
- ・ コスト削減（生産コスト、事務コスト） 70.0%（2019年比5.5%減）

重要な経営課題に対してデジタル技術で「未対応」「対応できることを知らない」と回答した割合は、次のとおりであった。

- ・ 生産性向上・事務効率化 24.6%（2019年比5.2%減）
- ・ 売上拡大（販路開拓・高付加価値化） 39.2%（2019年比4.5%減）
- ・ コスト削減（生産コスト、事務コスト） 34.1%（2019年比5.6%減）

【ヒアリング調査結果】

経営課題の解決手段としてのデジタル技術の活用については、次のような声があった。

- ・ デジタル化は、生産設備の導入に比べて効果が見えにくい。
- ・ デジタル技術の導入効果を具体的に紹介してくれる機会があれば良いと思う。

【今後の対応】

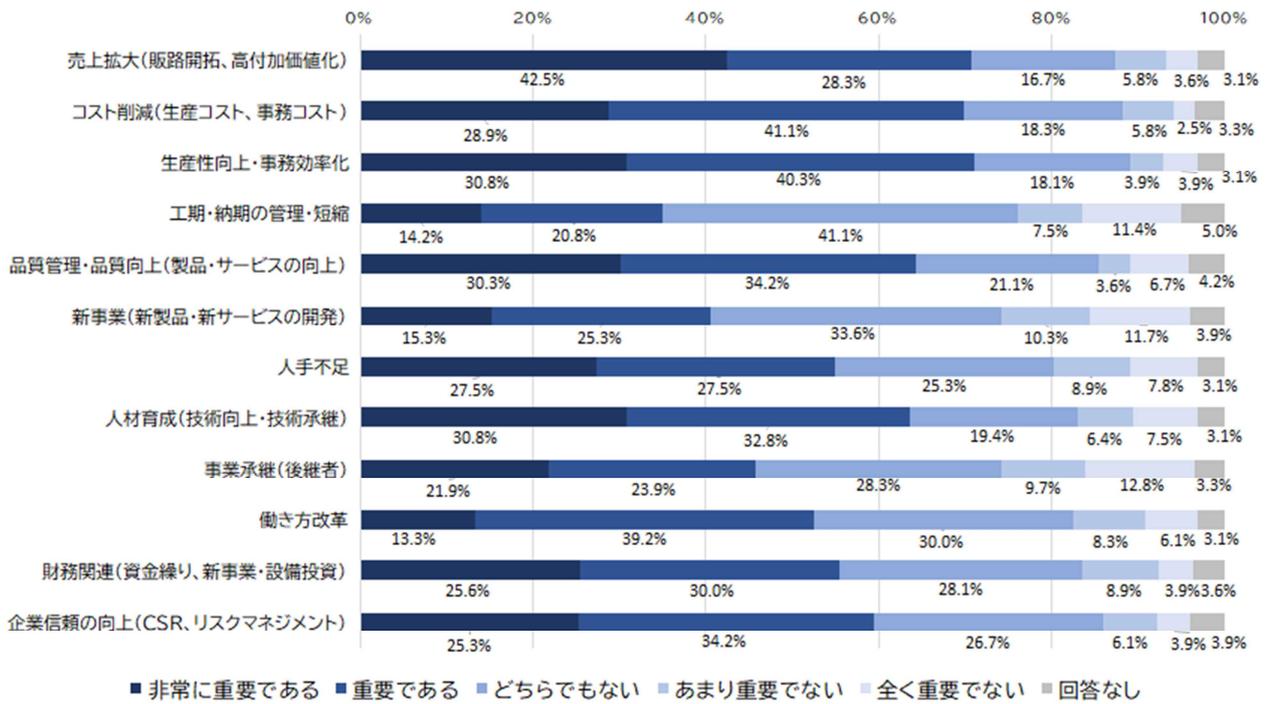
重要な経営課題に対してデジタル技術で「未対応」「対応できることを知らない」と回答した事業者の割合は前回調査より減っており、デジタル技術の有効性は以前よりも理解されつつあるが、依然として3割～4割程度の事業者が経営課題の解決手段としてデジタル技術を活用できていない状況にある。

一方、重要な経営課題に対してデジタル技術で「対応済」「対応中・検討中」と回答した事業者は、6割～7割程度存在するものの、「生産性向上・事務効率化」が75.0%であるのに対して、「コスト削減（生産コスト、事務コスト）」は65.0%であり、この差分は、デジタル技術の活用を付加価値に転換できていない事業者が一定割合いることを示していると考えられる。

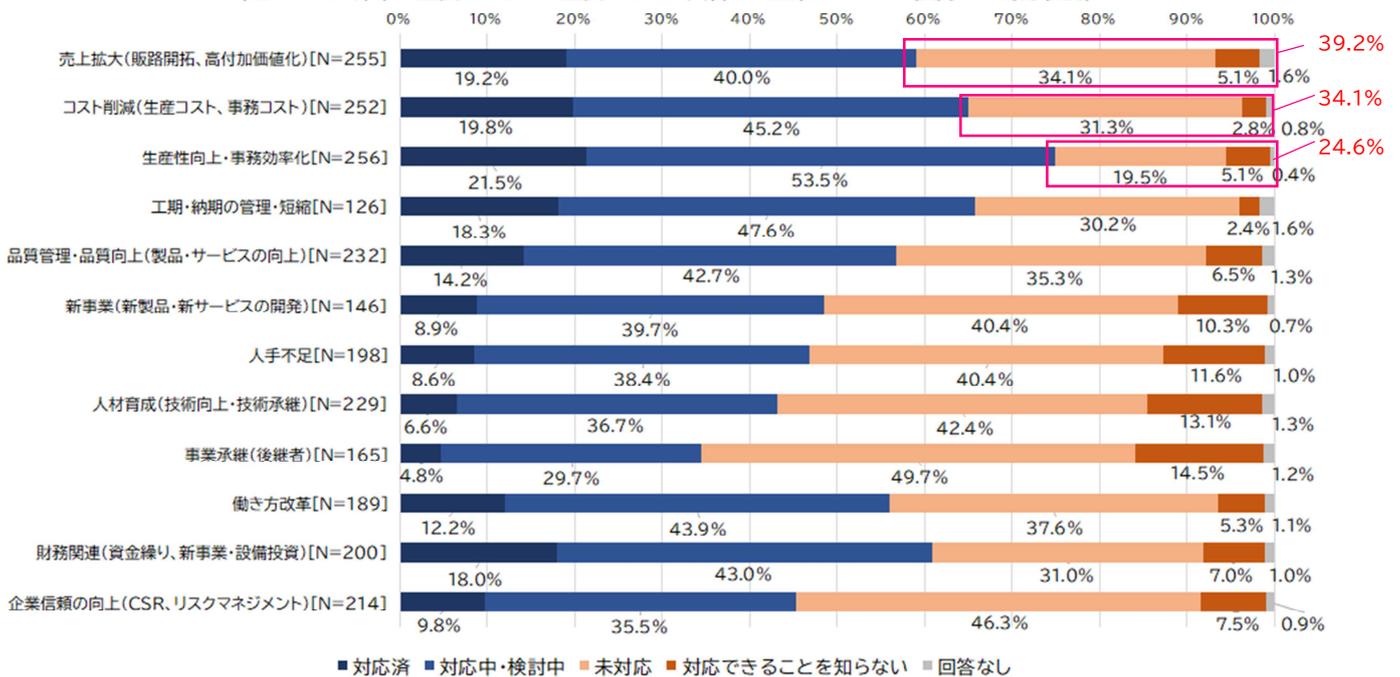
物価高騰や人手不足への対応など企業経営における課題が山積する中で、国内外における競争力の強化を図るとともに、デジタル化が当たり前になりつつある社会の潮流に対応していくためには、デジタル技術を効果的に活用する必要がある。

県では、事業者の経営課題の解決に向けて、デジタル技術の活用を普及・啓発するため、成果が出ている県内事業者の具体的な事例を業界別に横展開していくほか、ITコーディネーターや産業技術センターの研究者による伴走支援を行いながら、デジタル化の必要性や効果を上げるための工夫などを周知していく。

経営課題の重要度合[Q2-1]



重要な経営課題におけるデジタル技術での対応状況[Q2-2] (Q2-1で5:非常に重要である、4:重要であると回答した企業のデジタル技術での対応状況)



③ デジタル技術の活用予定がない事業者は3割、その内4割は必要性を感じていない

【アンケート調査結果】

今後のデジタル技術の活用予定については、前回調査（2019年）からの変化は、ほとんど見られなかった。

- ・ 良いシステムやサービスがあれば検討する 49.7%（2019年比0.3%減）
- ・ 新たな導入・検討の予定はない（現状のまま） 33.1%（2019年比0.9%増）
- ・ 積極的に活用する 14.4%（2019年比0.4%増）

新たな導入・検討の予定はない理由は、「デジタル技術導入の必要性を感じていない」が41.2%で最も高く、次いで「デジタル技術導入の資金的な余裕がない」が24.4%であった。

【ヒアリング調査結果】

新たな導入・検討の予定はない（現状のまま）理由について、次のような声があった。

- ・ 個人事業主などにおいては、特に必要性を感じてない。
- ・ 人の代替（人件費の削減）になるのであれば活用したいが、現時点では効果が不明なため踏み切れない。

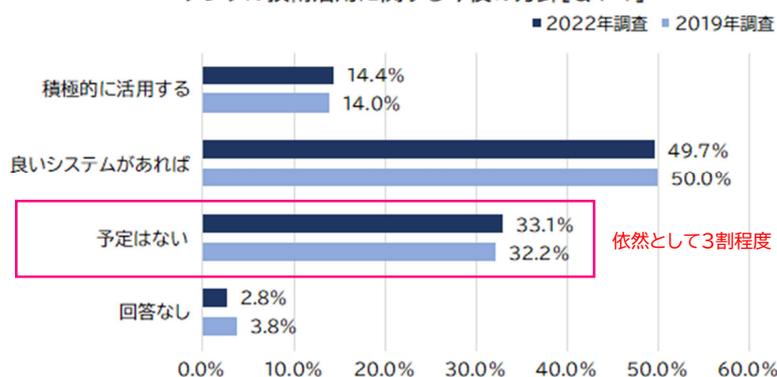
【今後の対応】

物価高騰や人手不足への対応など企業経営における課題が山積する中で、デジタル技術の活用が当たり前になりつつある社会の潮流に対応していくためには、「積極的に活用する」や「良いものがあれば活用していく」という回答が増えることが望まれる。

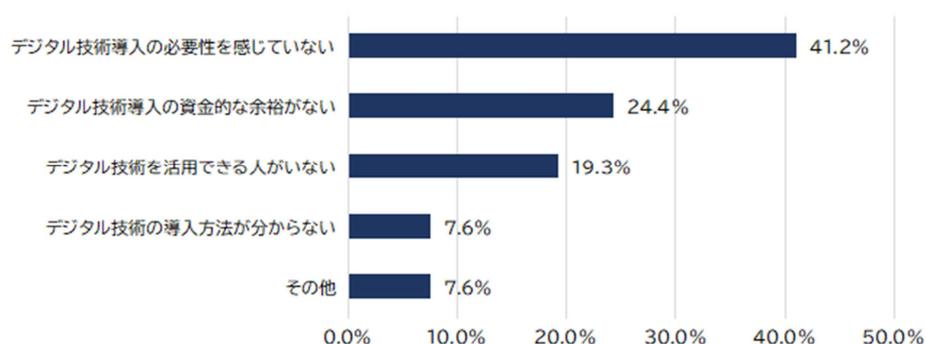
事業者がデジタル化を進めるためには、全社的な理解と強いリーダーシップが欠かせないことから、経営者層に対する普及啓発や意識改革が必要である。

県では、経営者層と従業員が一体となってデジタル化に取り組む計画を策定・実践する企業への支援や、デジタル化に関する知識・技能の習得を支援する研修会の開催等の取組を進めていく。

デジタル技術活用に関する今後の方針【Q4-1】



新たな導入や検討の予定はない（現状のまま）の理由【Q4-2】



④ デジタル技術導入における主な問題点は、費用負担と従業員のスキル不足

【アンケート調査結果】

デジタル技術導入における問題点の上位は、次のとおりであった。

- ・ 費用負担 56.9% (2019年比 3.1%増)
- ・ 従業員のスキル不足 35.0% (2019年比 8.3%増)

【ヒアリング調査結果】

費用負担と人材育成について、次のような声があった。

- ・ 社内で決裁を取るために経費削減などの効果を示してもらえると導入しやすい。
- ・ デジタル技術に関心はあるものの、通常業務を行う中で従業員が自ら学び、経営者層に必要性を理解してもらうことは容易ではない。

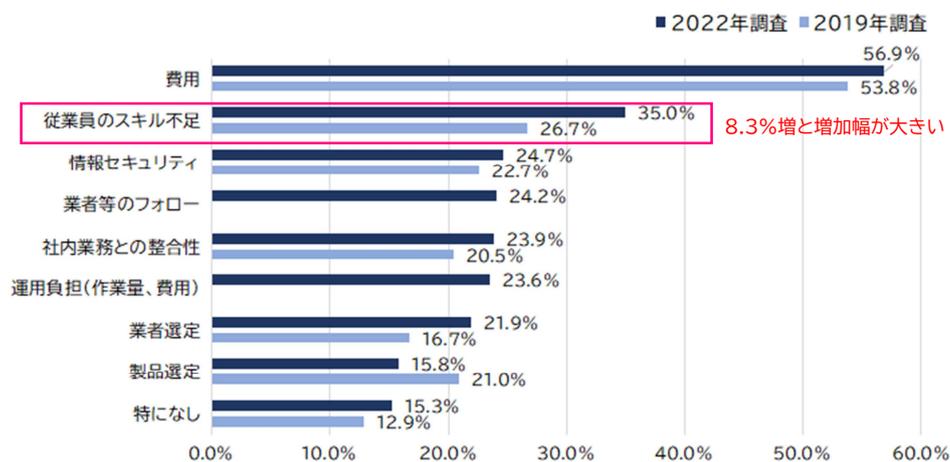
【今後の対応】

事業者のデジタル化への取組が進んでいない要因として「費用」が挙げられていることから、デジタル技術の導入における費用対効果への理解を促す必要がある。

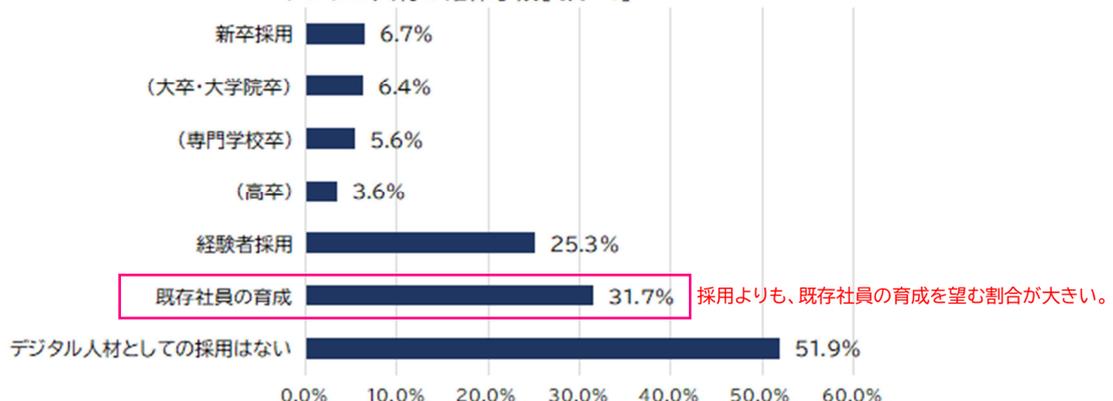
また、従業員のスキル不足を問題点とする事業者の割合が前回調査より多くなっていることに加え、新たな採用を図るよりも従業員の育成によりデジタル人材を充足していくことを望む事業者が多い。

県では、クラウドサービス等のトライアル導入やIoTの技術を体験する研修会を開催するほか、事業者に寄り添いながらニーズを把握し、更なる支援の必要性について検討していく。

デジタル技術導入における問題点[Q3-5]



デジタル人材の確保手段[Q6-4]



B 定量調査（アンケート調査）

Q2 経営課題とデジタル技術による対応状況

○経営課題の重要度合 [Q2-1]

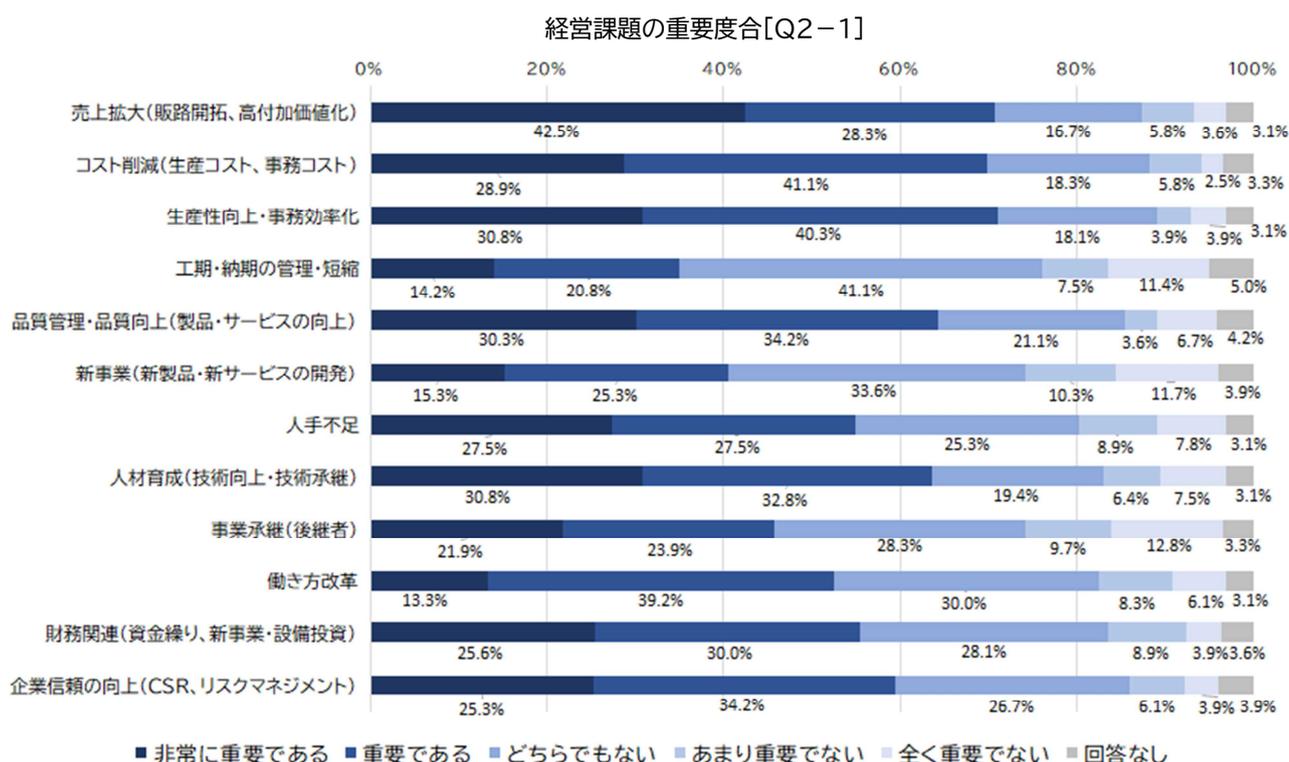
「非常に重要である」とした項目は、「売上拡大（販路開拓・高付加価値化）」（42.5%）が最も高く、次いで「生産性向上・事務効率化」（30.8%）、「人材育成（技術向上・技術承継）」（30.8%）の順であった。

「非常に重要である」と「やや重要である」の合計で見ると、1位が「生産性向上・事務効率化」（71.1%）、次いで「売上拡大（販路開拓・高付加価値化）」（70.8%）、「コスト削減（生産コスト、事務コスト）」（70.0%）であった。

【考察】

利益に直結する売上と費用に関する項目が上位であったほか、人材の確保・育成、品質向上に関する項目が上位であった。

一方、新事業（新製品・新サービスの開発）を重要とする事業者は比較的少なく、県内事業者は、人手不足の中で、既存の事業を効率良く進めていくことを重要と考えていることが伺える。



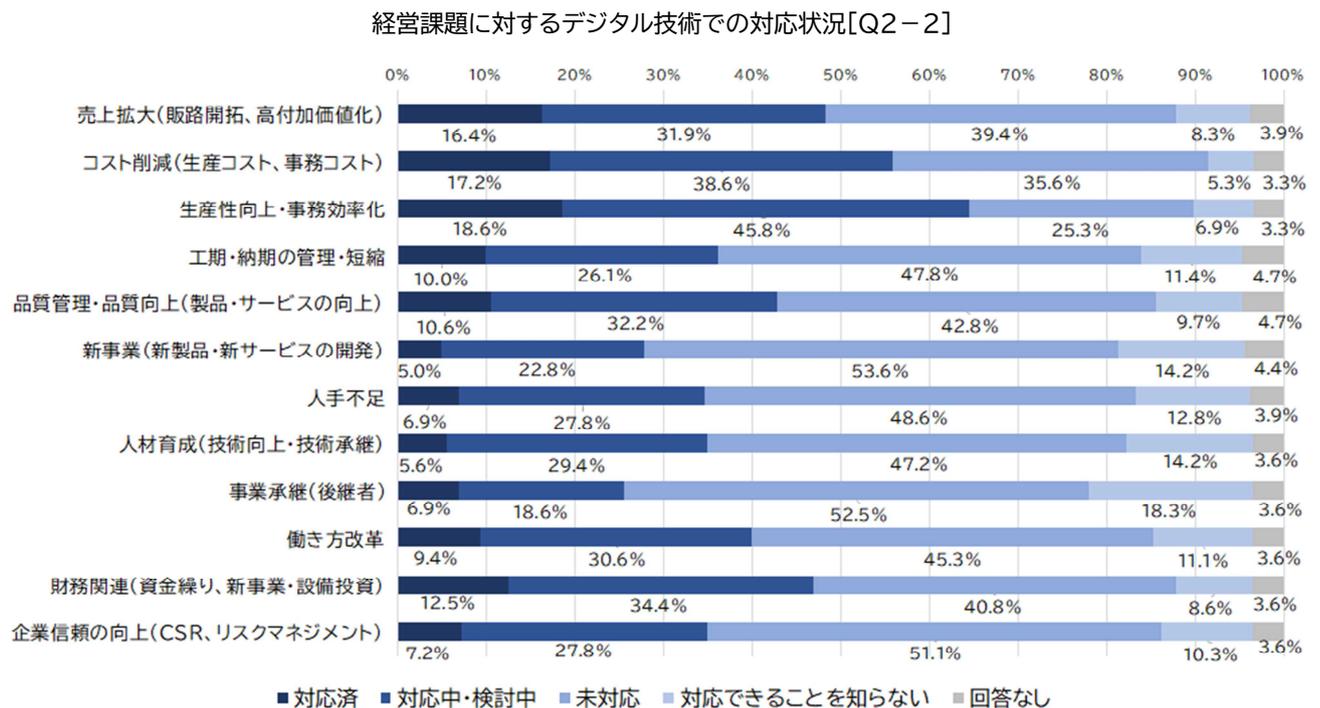
(N=360)

○経営課題に対するデジタル技術での対応状況 [Q2-2]

デジタル技術で「対応済」または「対応中・検討中」の経営課題は、「生産性向上・事務効率化」(66.4%)が最も高く、次いで「コスト削減(生産コスト、事務コスト)」(55.8%)、「売上拡大(販路開拓・高付加価値化)」(48.3%)の順であった。

【考察】

特にQ2-1で上位であった経営課題(売上拡大、生産性・事務効率化、コスト削減)については、優先的にデジタル技術の対応が進んでいる。



(N=360)

○重要な経営課題におけるデジタル技術での対応状況 [Q2-1×Q2-2]

重要な経営課題について、「非常に重要である」または「やや重要である」と回答した事業者の内、デジタル技術で「未対応」「対応できることを知らない」と回答した割合は、「生産性向上・事務効率化」が24.6%、「売上拡大（販路開拓・高付加価値化）」が39.2%、「コスト削減（生産コスト、事務コスト）」が34.1%であった。

【考察】

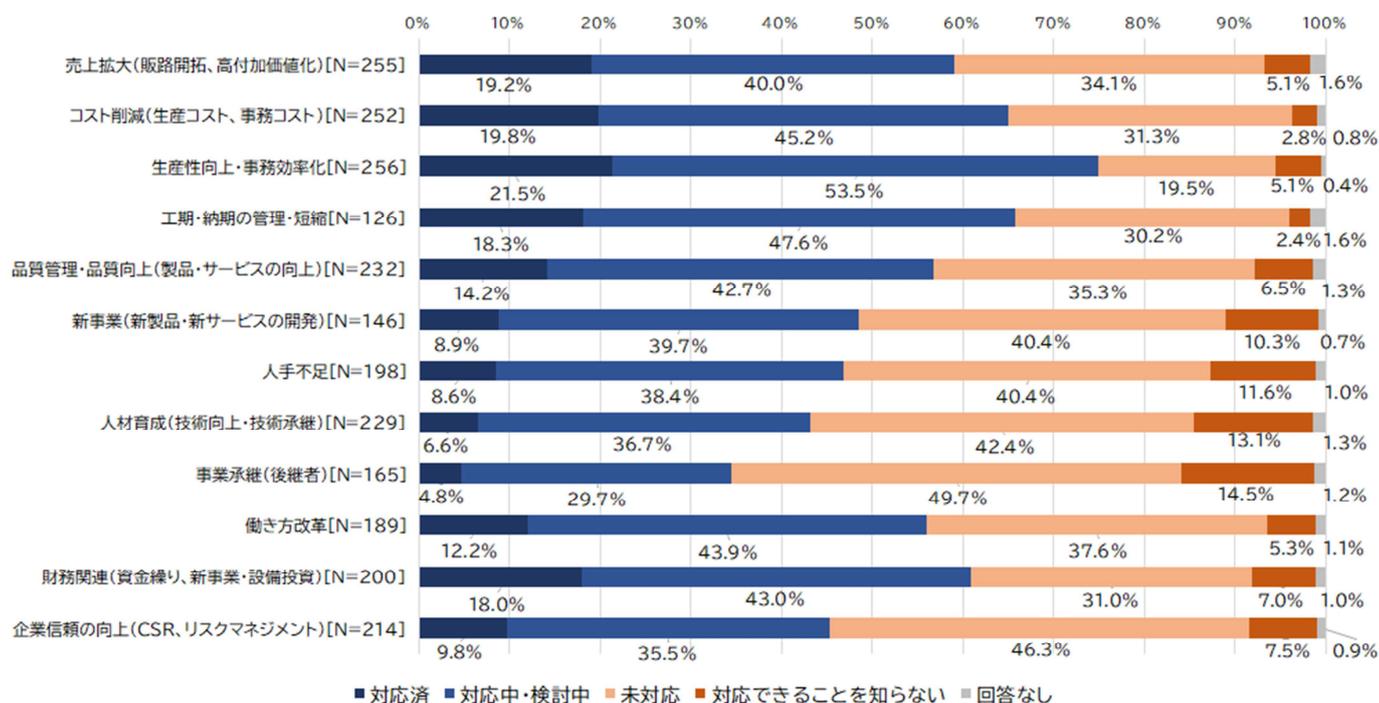
経営課題に対してデジタル技術で「未対応」「対応できることを知らない」と回答した企業の割合は前回調査より減っており、デジタル技術の有効性は以前よりも理解されつつあるが、依然として3割～4割程度の企業が経営課題の解決手段としてデジタル技術を活用できていない状況にある。

また、「対応済」や「対応中・検討中」と回答した割合は、「生産性向上・事務効率化」が75.0%であるのに対して、「コスト削減（生産コスト、事務コスト）」は65.0%であり、この差分は、デジタル技術の活用を付加価値に転換できていない事業者が一定割合いることを示しているとも考えられる。

経営課題の解決にデジタル技術を活用する企業が増えるよう、成果が出ている県内事業者等の具体的な事例を横展開していくことが必要である。

重要な経営課題に対するデジタル技術での対応状況 [Q2-1×Q2-2]

(Q2-1で、「非常に重要である」や「重要である」と回答した企業のデジタル技術での対応状況)



Q3 デジタル技術活用の現状

○活用しているデジタル技術 [Q3-1]

汎用ソフトについては、「電子メール」が78.3%（2019年比8.6%増）、「オフィスツール」が73.9%（2019年比4.7%減）と、約70%～80%の事業者が利用している。

業務ソフトについては、「税務会計システム」が61.1%（2019年比30.6%増）が最も高く、次いで「人事給与システム」が42.8%（2019年比21.2%増）、「販売管理システム」が31.4%（2019年比7.2%増）の順であった。

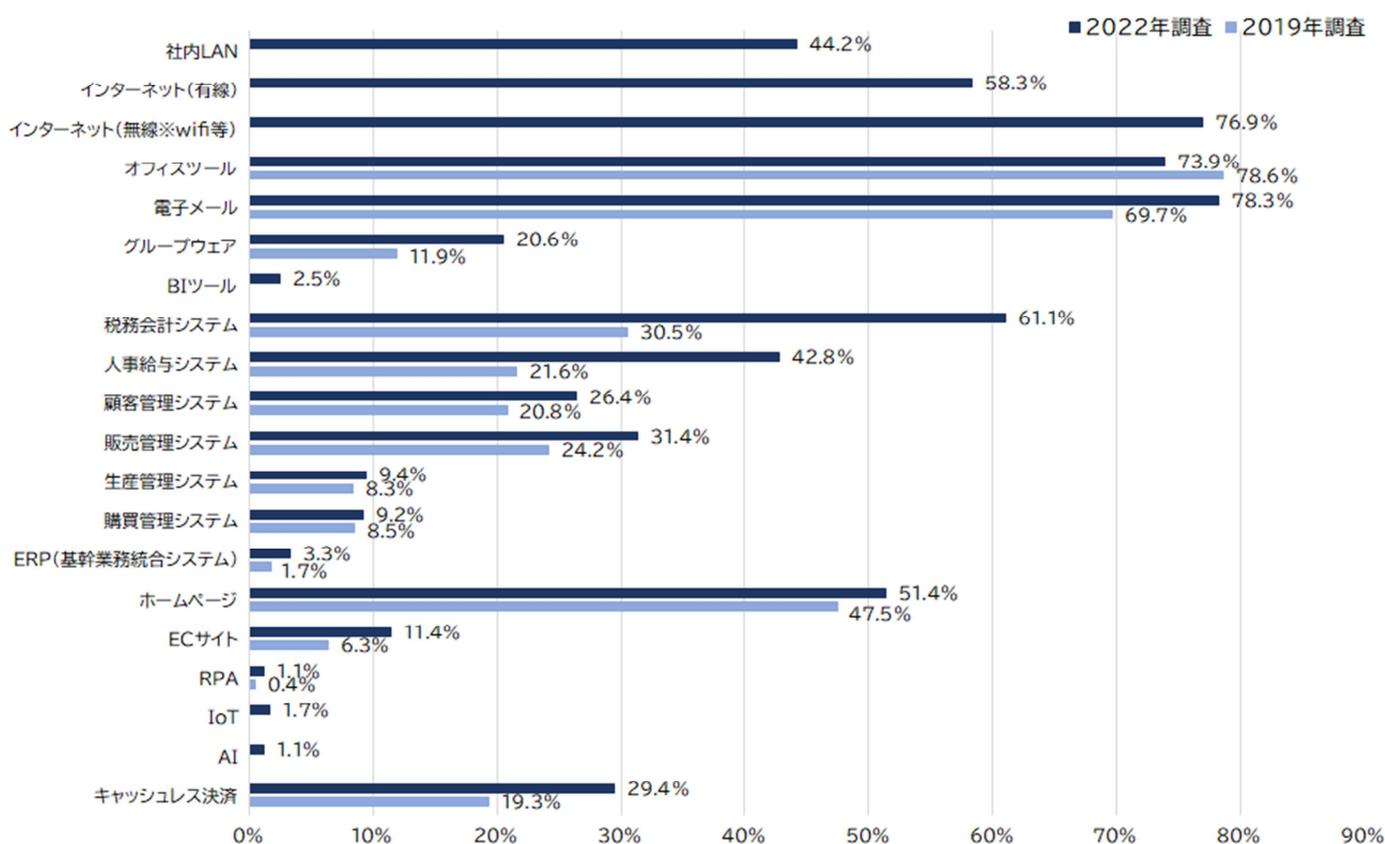
【考察】

個別の業務システムを活用している割合は、前回調査より増加しており、個別業務のデジタル化は進んでいることが伺える。

特に、税務会計システムは約60%の事業者が利用しており、前回調査（2019年）比で約2倍となっている。ヒアリング調査では、税理士から指定の税務会計システムの利用を案内されたという話が複数あり、税務会計システムの利用はその製品選定も含め、関係のある税理士等の影響が大きいと考えられる。

また、業種別に見た特徴としては、製造業のグループウェアの活用割合が31.7%と他業種に比べ高いこと、卸売業・小売業においてキャッシュレス決済が約5割（49.2%）となっていることが挙げられる。

活用しているデジタル技術[Q3-1]



(2022年 N=360、2019年 N=528)

活用しているデジタル技術(業種別割合) [Q3-1]

| | 製造業 [41] | 卸売業・小売業 [65] | 建設業 [39] | 医療福祉 [37] | サービス業その他 [171] |
|-------------------|-------------|-----------------|-------------|--------------|-------------------|
| 社内LAN | 51.2% | 38.5% | 48.7% | 48.6% | 41.5% |
| インターネット(有線) | 58.5% | 64.6% | 51.3% | 54.1% | 58.5% |
| インターネット(無線※wifi等) | 80.5% | 78.5% | 74.4% | 86.5% | 74.3% |
| オフィスツール | 78.0% | 76.9% | 76.9% | 70.3% | 71.3% |
| 電子メール | 80.5% | 76.9% | 76.9% | 81.1% | 77.8% |
| グループウェア | 31.7% | 21.5% | 12.8% | 16.2% | 18.7% |
| BIツール | 2.4% | 3.1% | 2.6% | 2.7% | 1.2% |
| 税務会計システム | 58.5% | 60.0% | 53.8% | 62.2% | 62.6% |
| 人事給与システム | 48.8% | 38.5% | 41.0% | 54.1% | 39.8% |
| 顧客管理システム | 19.5% | 32.3% | 15.4% | 29.7% | 25.7% |
| 販売管理システム | 31.7% | 60.0% | 17.9% | 10.8% | 27.5% |
| 生産管理システム | 31.7% | 6.2% | 15.4% | 5.4% | 4.7% |
| 購買管理システム | 14.6% | 20.0% | 5.1% | 5.4% | 4.7% |
| ERP(基幹業務統合システム) | 9.8% | 1.5% | 0.0% | 5.4% | 2.9% |
| ホームページ | 56.1% | 43.1% | 38.5% | 54.1% | 56.1% |
| ECサイト | 22.0% | 18.5% | 10.3% | 0.0% | 9.4% |
| RPA | 0.0% | 3.1% | 0.0% | 0.0% | 1.2% |
| IoT | 2.4% | 3.1% | 0.0% | 0.0% | 1.8% |
| AI | 0.0% | 1.5% | 0.0% | 0.0% | 1.8% |
| キャッシュレス決済 | 22.0% | 49.2% | 7.7% | 8.1% | 33.3% |

○デジタル技術活用の満足度 [Q3-2]

「満足している」と「やや満足している」の合計は36.9%（2019年比9.1%減）、「全く満足していない」と「あまり満足していない」の合計は13.0%（2019年比6.8%増）、「どちらともいえない」が43.1%（2019年比11.5%増）であった。

「満足している」や「やや満足している」と回答した企業がその理由として挙げたものは、「生産性向上・事務効率化への影響」（66.9%）が最も高く、次いで「売上拡大への影響」（41.4%）、「コスト削減への影響」（32.3%）の順であった。

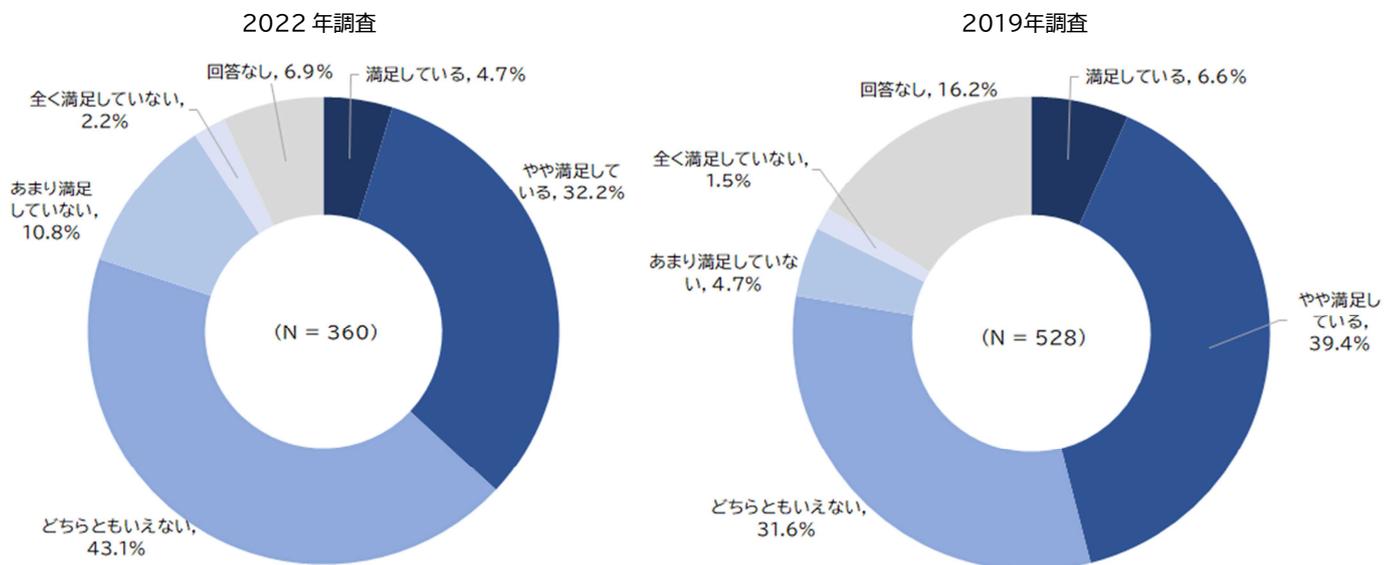
一方で、「全く満足していない」や「あまり満足していない」と回答した企業がその理由として挙げたものは、「生産性向上・事務効率化への影響」（59.6%）が最も高く、次いで「コスト削減への影響」（53.2%）、「売上拡大への影響」（51.1%）の順であった。

【考察】

「大変満足している」や「やや満足している」の合計が「どちらともいえない」を下回り、デジタル技術活用に関する全体的な満足度については課題感が残っている。

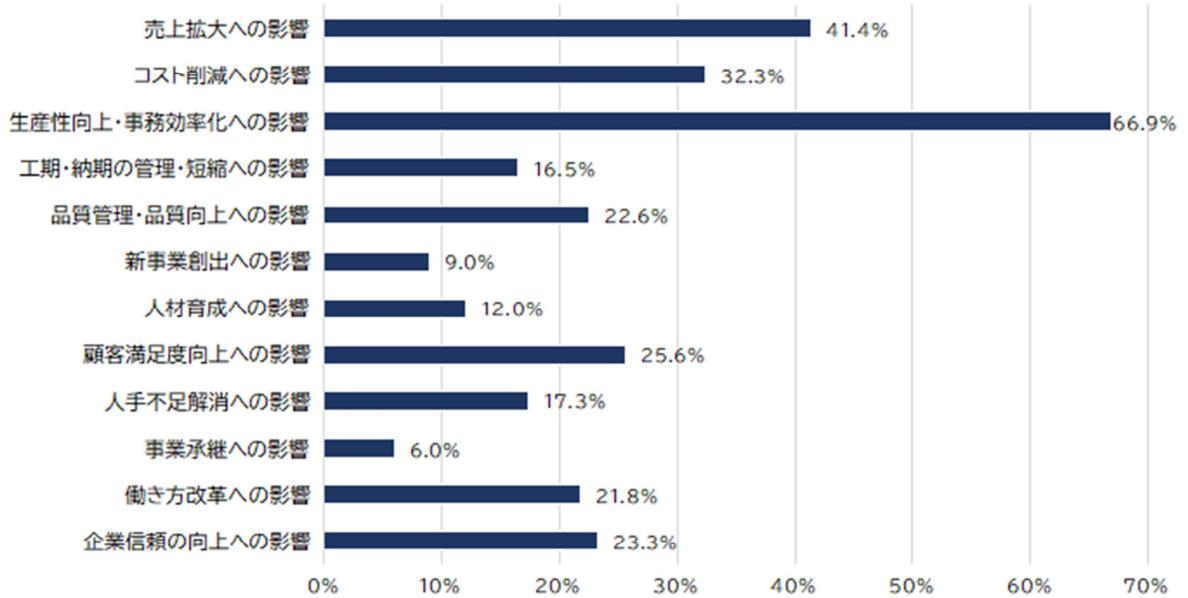
満足度の理由を踏まえるとデジタル技術の活用が「生産性向上・事務効率化」という点では一定の効果が出ているが、コスト削減や人手不足解消までは繋がっていない事業者が存在することが伺える。

デジタル技術活用に対する満足度[Q3-2]



デジタル技術活用に対する満足度の理由[Q3-2]

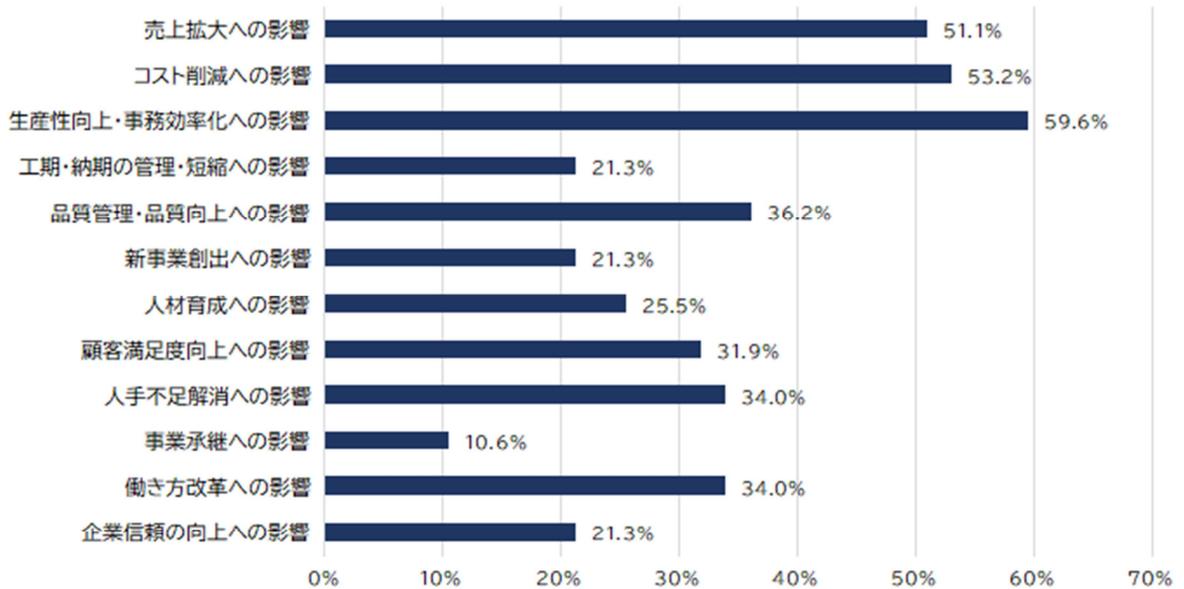
(Q3-1で、「5:大変満足している」または「4:やや満足している」と回答した企業)



(N=133)

デジタル技術活用に対する満足度の理由[Q3-2]

(Q3-1で、「2:あまり満足していない」または「1:全く満足していない」と回答した企業)



(N=47)

○デジタル技術の1年あたりの費用 [Q3-3]

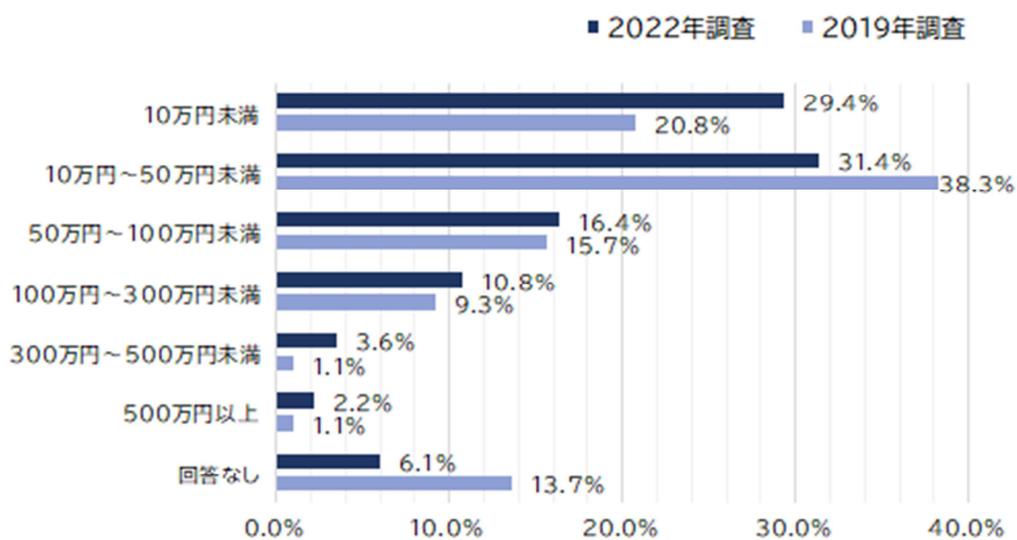
「10万円～50万円未満」が31.4%、「10万円未満」が29.4%であり、全体の約6割が50万円未満であった。

【考察】

前回調査に比べ、「10万円未満」と回答した割合が増えたほか、50万円以上と回答し割合が数%ずつ増加している。業種別では、「製造業」と「医療福祉」が比較的高くなっている。

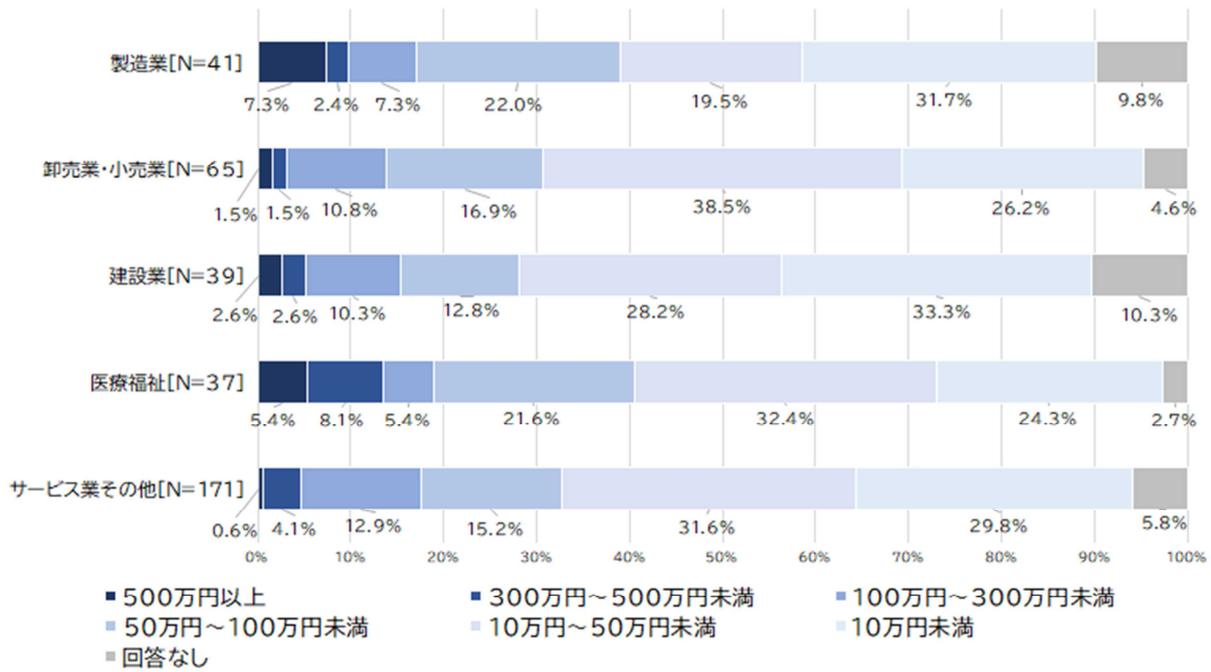
また、従業員数別では、事業者の規模（従業員数）に比例して費用が多くなっていることがわかる。

デジタル技術の1年あたりの費用[Q3-3]

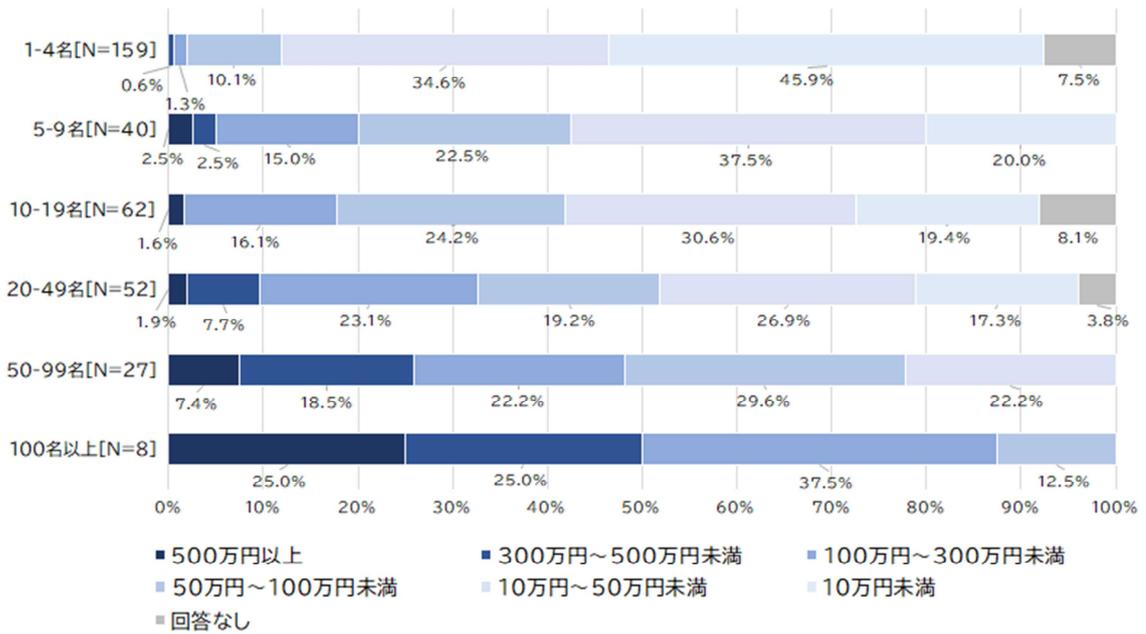


(2022年 N=360、2019年 N=528)

デジタル技術の利用に関する1年あたりの費用(業種別)[Q3-3]



デジタル技術の利用に関する1年あたりの費用(従業員数別)[Q3-3]



○デジタル技術活用における発注先 [Q3-4]

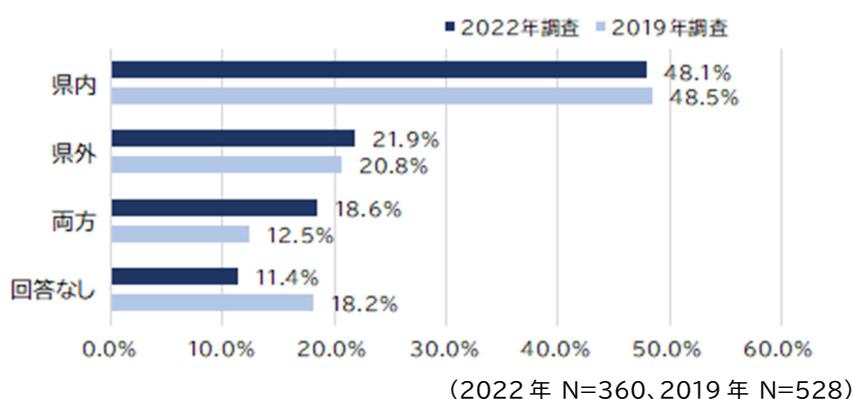
「県内」が48.1%、「県外」が21.9%、「両方」が18.6%であった。

【考察】

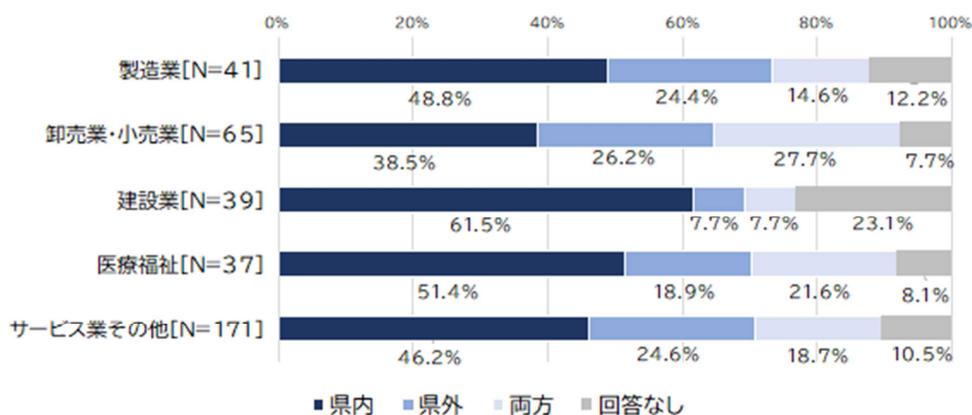
「県内」と「両方」の合計は約7割となっており、2019年の調査から大きな変化は見られない。Q9-1の結果では、情報関連企業やオフィス機器等のディーラー、会計士・税理士等がデジタル技術関連での相談者として上位になっており、県内事業者はデジタル技術の活用において、身近なこれらの事業者を頼っていることが伺える。

また、地域別に見ると、県北部や県南部は、県中部に比べて県外発注の割合が若干高くなっている。

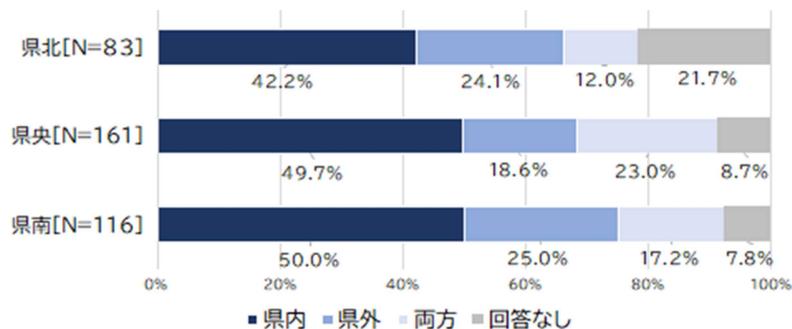
デジタル技術活用における発注先[Q3-4]



デジタル技術活用における発注先(業種別)[Q3-4]



デジタル技術活用における発注先(地域別)[Q3-4]



○デジタル技術の導入・運用における問題点 [Q3-5]

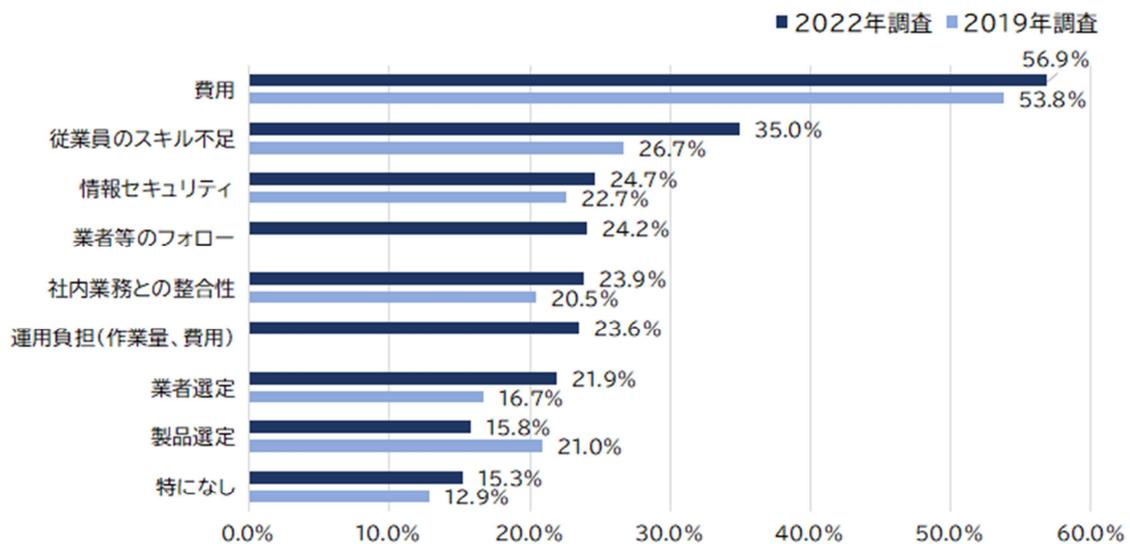
「費用」(56.9%) が最も高く、次いで「従業員のスキル不足」(35.0%)、「情報セキュリティ」(24.7%) の順であった。

【考察】

費用を問題点として挙げた企業は約6割に上った。費用という点では、自由記入欄に、「セキュリティ対策にお金がかかり大変。デジタル化は、お金がかかるように思う。」との回答もあった。

また、1/3の事業者が従業員のスキル不足を問題としており、デジタル技術を使いこなす人材が足りない状況の改善も必要である。

デジタル技術導入における問題点[Q3-5]



(2022年 N=360、2019年 N=528)

Q4 今後のデジタル技術の活用に関する意向・課題等

○デジタル技術活用に関する今後の方針 [Q4-1~2]

「良いシステムやサービスがあれば検討する」(49.7%)が最も高く、次いで「新たな導入や検討の予定はない(現状のまま)」(33.1%)、「積極的に活用する」(14.4%)の順であった。

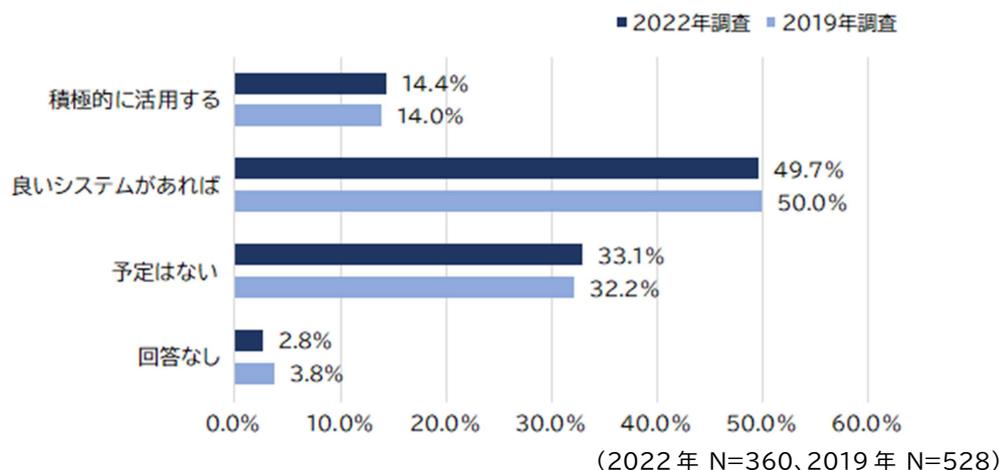
また、「新たな導入や検討の予定はない(現状のまま)」理由としては、「デジタル技術導入の必要性を感じていない」が41.2%で最も高く、次いで「デジタル技術導入の資金的な余裕がない」が24.4%であった。

【考察】

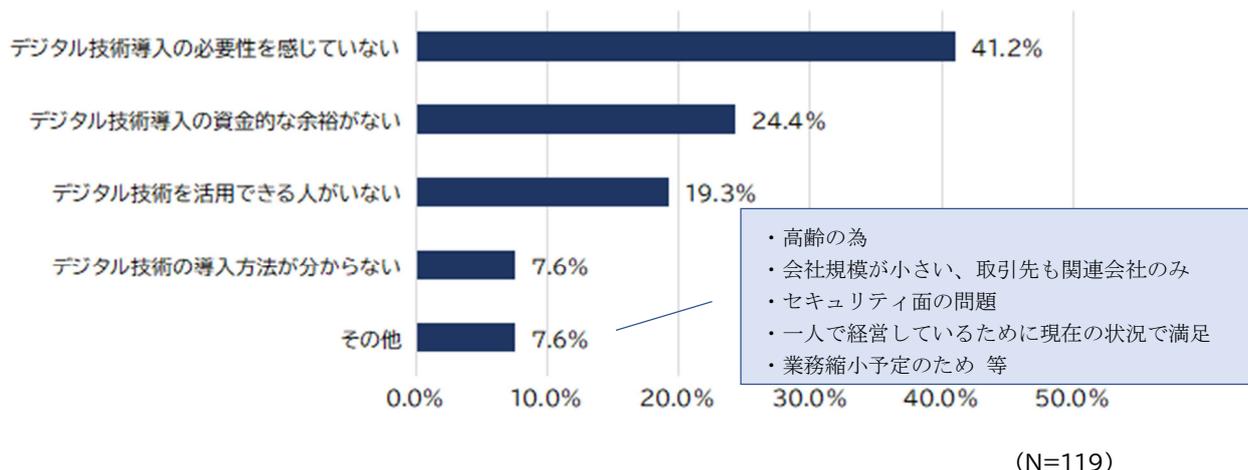
「新たな導入や検討の予定はない(現状のまま)」が3割であり、その理由としては約4割が「デジタル技術導入の必要性を感じていない」としている。これは、デジタル技術活用によるメリットや価値が十分に認知されていないことを意味すると考えられる。

普及啓発に当たっては、改めてデジタル技術を活用することにより事業者にとって何が便利になるのか、何ができるようになるのかといったメリットを明確に伝えていくことが必要であると考えられる。

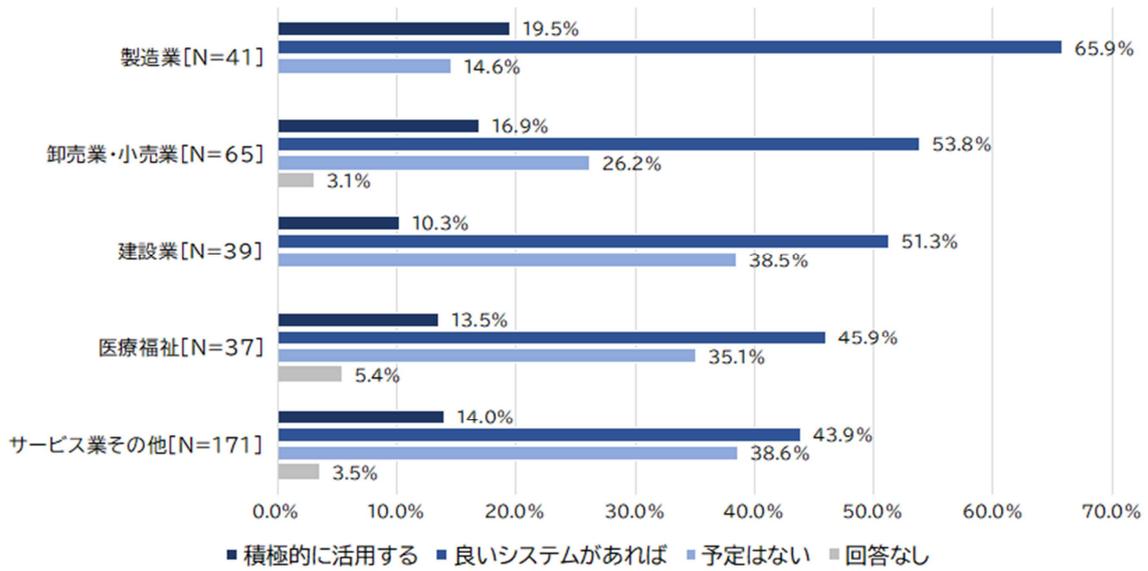
デジタル技術活用に関する今後の方針[Q4-1]



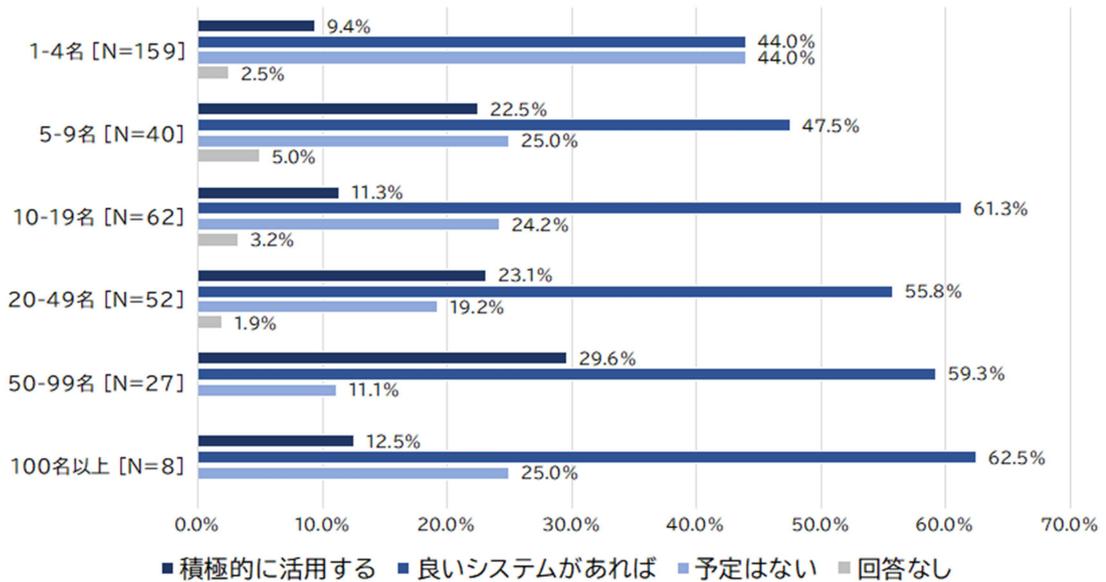
新たな導入・検討の予定はない(現状のまま)の理由[Q4-2]



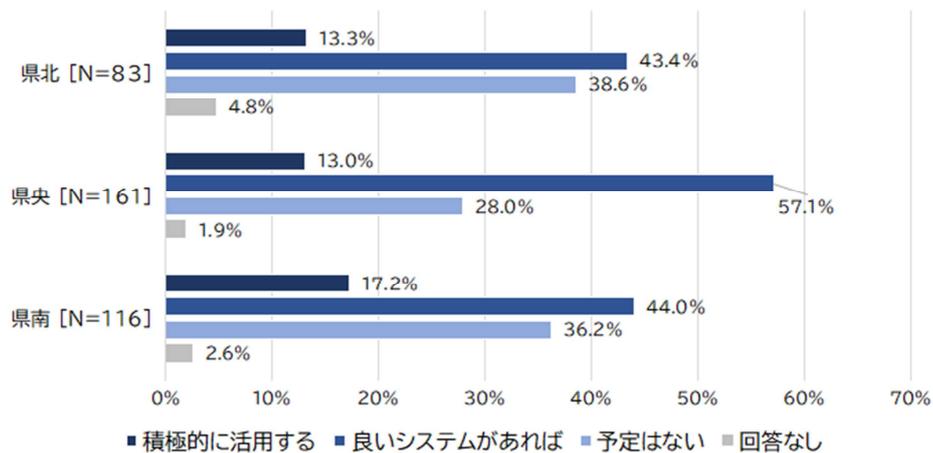
デジタル技術活用に関する今後の方針(業種別)[Q4-1]



デジタル技術活用に関する今後の方針(従業員数別)[Q4-1]



デジタル技術活用に関する今後の方針(地域別)[Q4-1]



○今後のデジタル技術導入の目的 [Q 4 - 3]

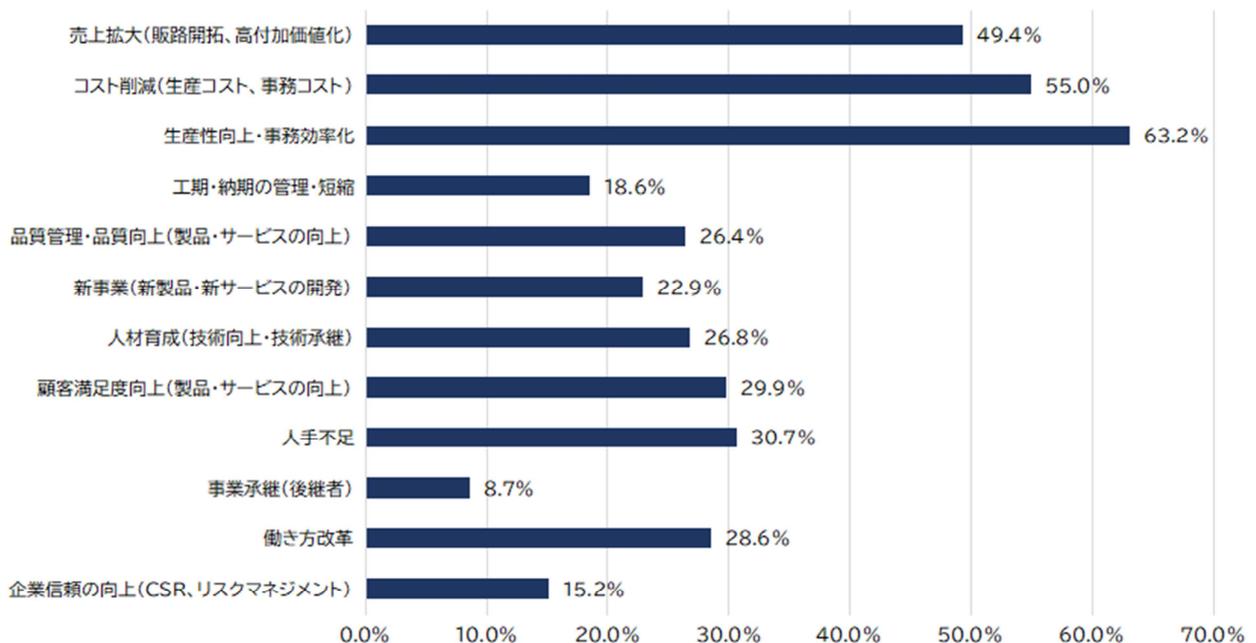
「生産性向上・事務効率化」(63.2%) が最も高く、次いで「コスト削減(生産コスト、事務コスト)」(55.0%)、「売上拡大(販路開拓、高付加価値化)」(49.4%) の順であった。

【考察】

今後、デジタル技術を導入するとなった場合の導入目的としては、生産性向上・事務効率化、コスト削減(生産コスト、事務コスト)、売上拡大(販路開拓、高付加価値化)が上位となったが、これはQ 3 - 1での経営課題の重要度が高いものとして挙げられている項目である。Q 4 - 1 ~ 2の結果を踏まえれば、デジタル技術を活用することにより事業者にとって何が便利になるのか、何ができるようになるのかといったメリットを周知していく際には、これらの経営課題をデジタル技術を活用してどう解決できるのか、を具体的にしていく必要がある。

今後のデジタル技術導入の目的[Q4-3]

(Q4-1で、「積極的に活用」または「良いシステムがあれば活用」と回答した企業)



(N=231)

○関心のあるデジタル技術 [Q4-4]

「顧客管理システム」(23.8%)が最も高く、次いで「税務会計システム」(20.3%)、「販売管理システム」(19.5%)の順であった。

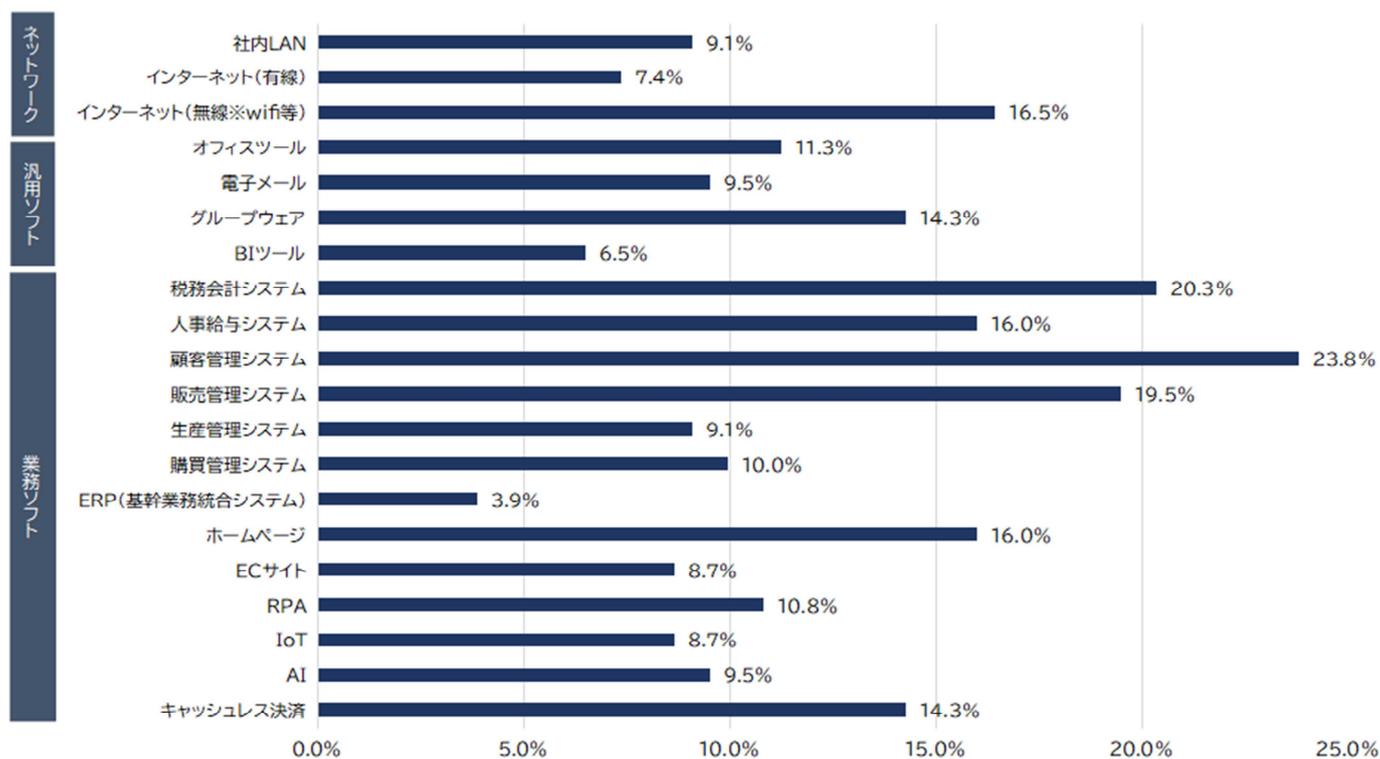
【考察】

関心の高いデジタル技術としては「顧客管理システム」、「税務会計システム」、「販売管理システム」など、活用の割合が前回調査から増加している業務ソフトウェアが多くなっている。

また、現在、AIやIoT、RPAを活用する事業者の割合は低いですが、これらの技術に関心のある事業者は10%程度存在する。関心のある事業者が活用しきれていない場合は、その理由についてヒアリング等による追加調査が必要である。

関心のあるデジタル技術[Q4-4]

(Q4-1で、「積極的に活用」または「良いシステムがあれば活用」と回答した企業)



(N=231)

○今後のデジタル技術導入・運用における問題および投資可能額 [Q4-5~6]

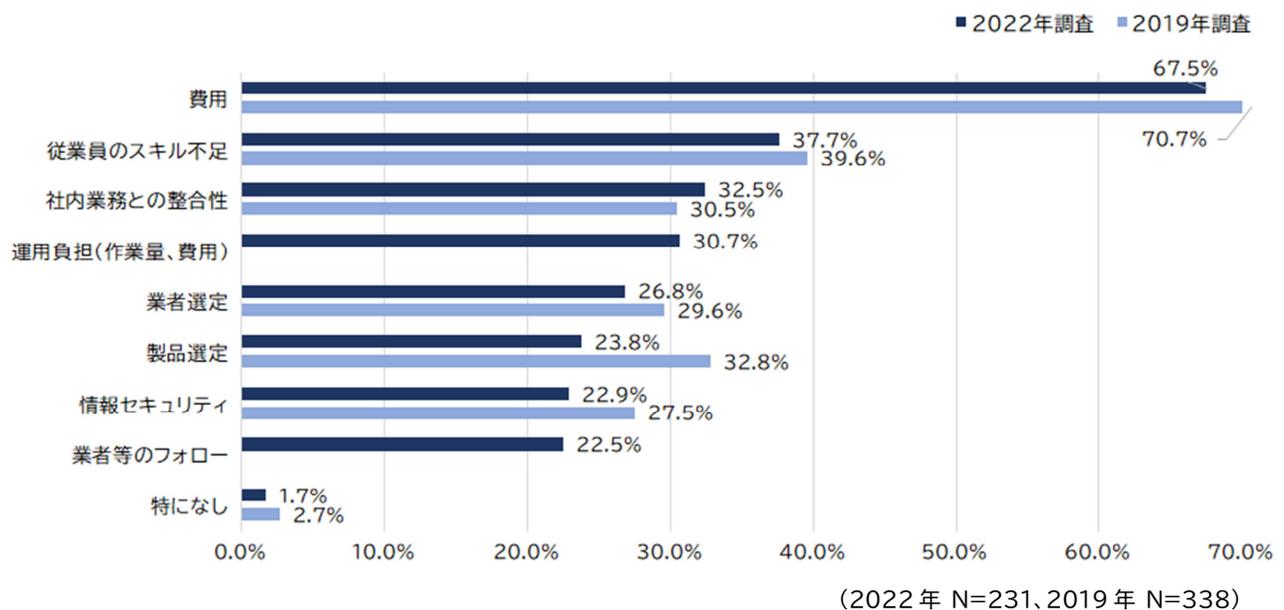
「費用」(67.5%) が最も高く、次いで「従業員のスキル不足」(37.7%)、「社内業務との整合性」(32.5%) であった。また、投資可能額については「10万円~50万円未満」が25.1%で最も高く、300万円未満が約7割に上った。

【考察】

導入費用を問題とする事業者が約7割であり、投資可能額が300万円未満の事業者は7割程度であることから、デジタル化を進めて行く際には、メリットに限らず、事業者の投資可能額を踏まえた提案や価格体系の提示が必要である。

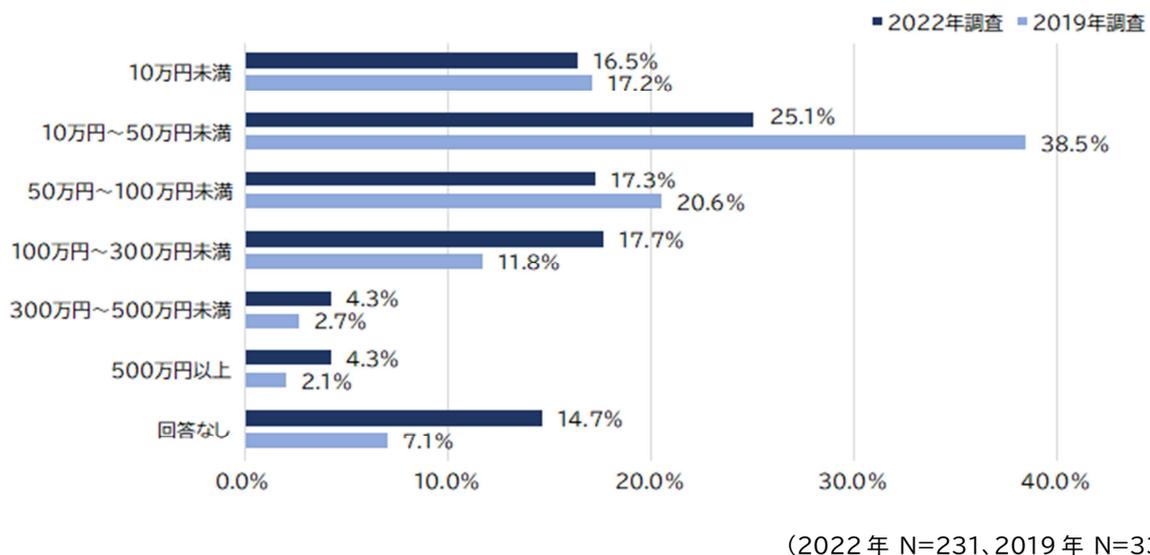
今後のデジタル技術導入・運用における問題点[Q4-5]

(Q4-1で、「積極的に活用」または「良いシステムがあれば活用」と回答した企業)



今後のデジタル技術導入・運用における投資可能額[Q4-6]

(Q4-1で、「積極的に活用」または「良いシステムがあれば活用」と回答した企業)



Q5 DX（デジタルトランスフォーメーション）について

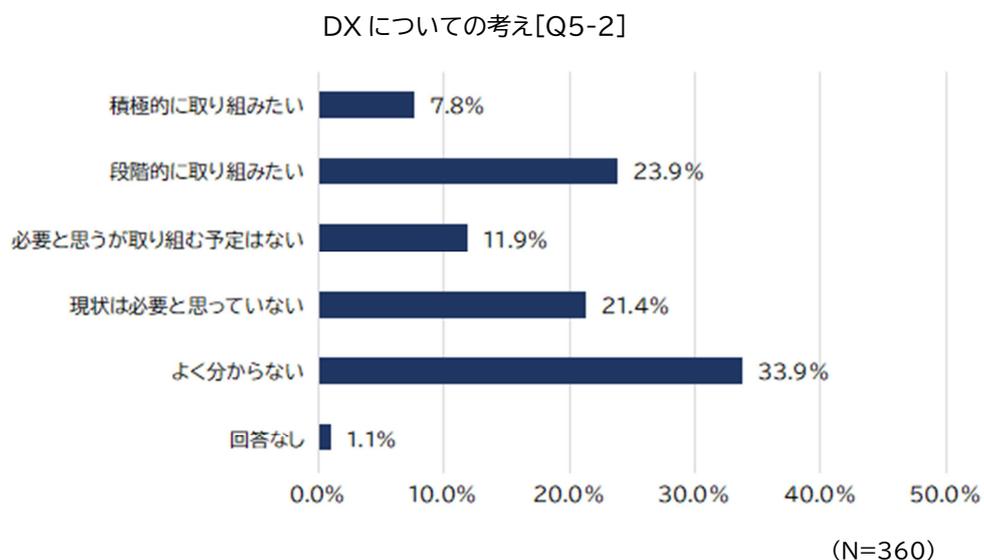
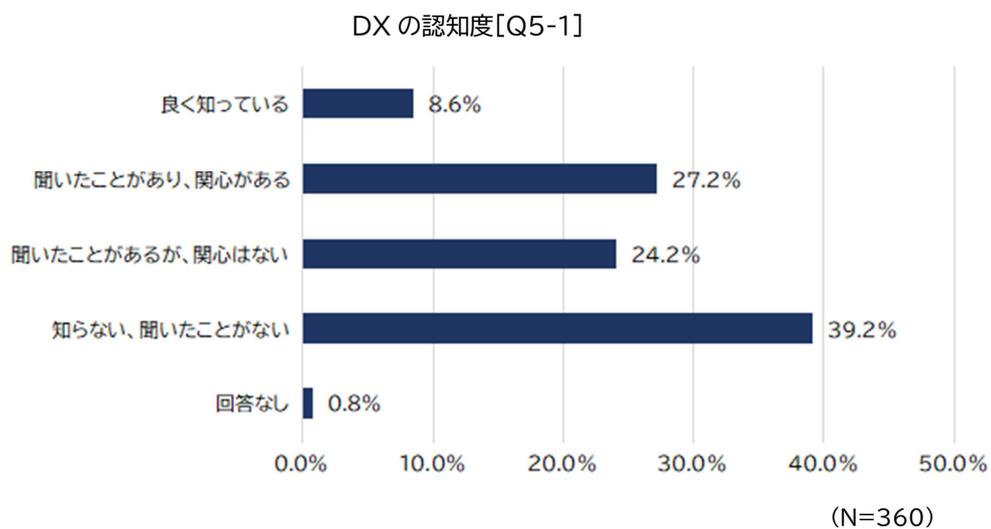
ODXの認知度と考え [Q5-1~2]

「知らない、聞いたことがない」(39.2%)が最も高く、次いで「聞いたことがあり、関心がある」(27.2%)、「聞いたことがあるが、関心はない」(24.2%)となった。

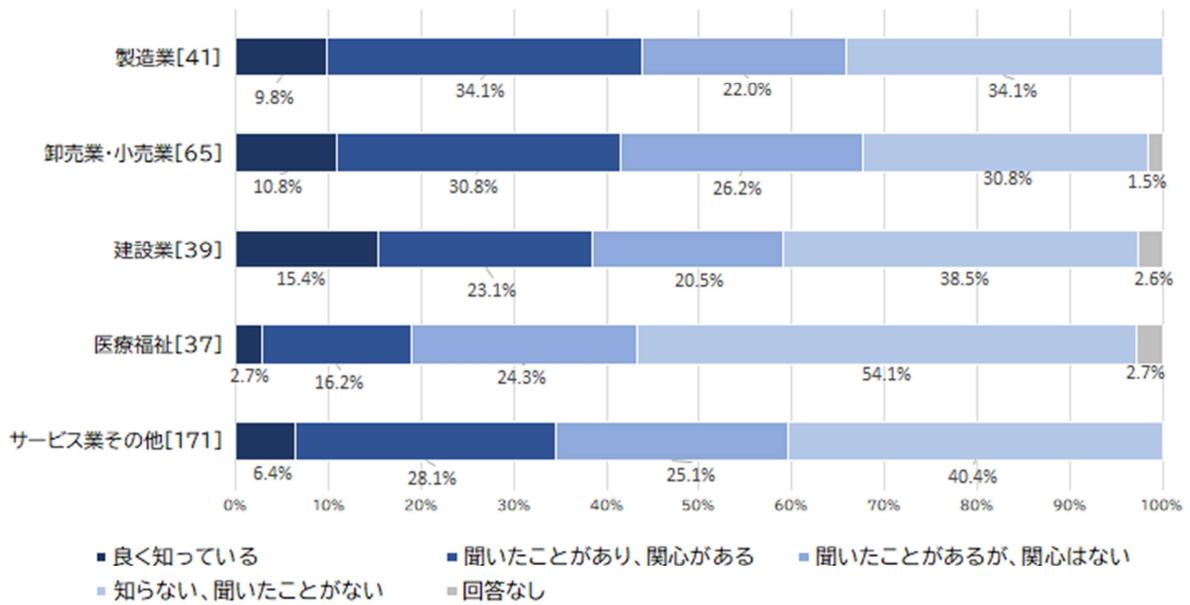
また、DXについての考えは「よく分からない」(33.9%)が最も高く、次いで「段階的に取り組みたい」(23.9%)、「現状は必要とっていない」(21.4%)の順であった。

【考察】

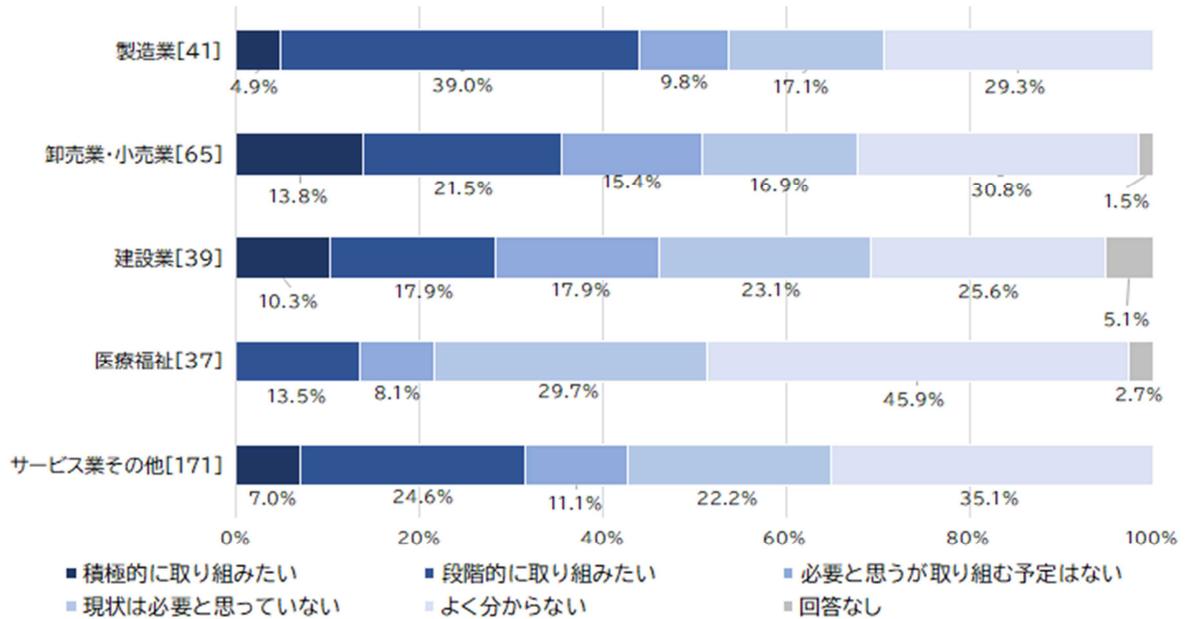
DXについての認知度はそれをよく認知し、関心がある層（約4割）と、関心がない層（「聞いたことがあるが、関心はない」と「知らない、聞いたことがない」の合計が6割）になっている。DXについて、「必要と思うが取り組む予定はない」(11.9%)と「現状は必要とっていない」(21.4%)の事業者については、ヒアリング調査により理由等を把握する必要がある。



DXの認知度(業種別)[Q5-1]



DXについての考え(業種別)[Q5-2]



Q6 デジタル人材の確保・育成状況

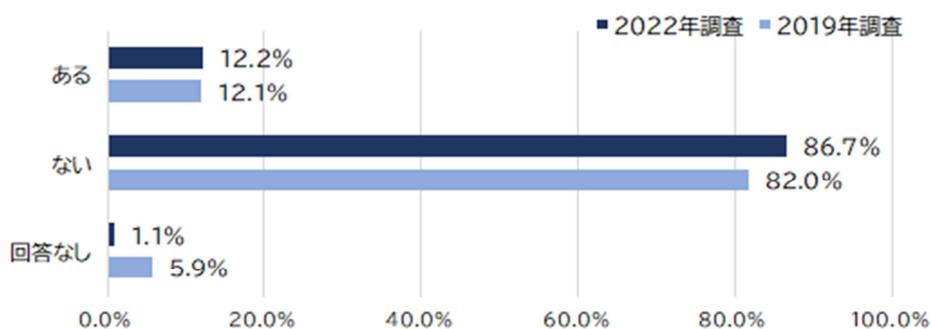
○システム担当部署有無および担当者人数 [Q6-1]

システム担当部署は「ない」が86.7%、「ある」が12.2%であった。担当部署の有無を問わず、システム担当者がある場合における担当者数については「1名」(61.9%)が最も多く、次いで「2名」(25.0%)の順であった。

【考察】

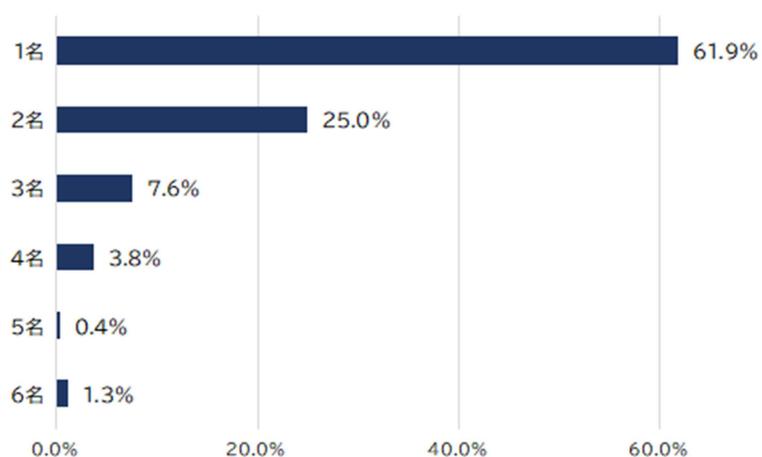
多くの事業者においてシステム担当部署という専門部署は設置されておらず、そのため担当者の人数も少ない傾向がある。システム担当という役割が、そのほかの職種と兼務されている(主担当は他職務だがシステム系の業務も行う)ことと推察される。

システム担当部署の有無[Q6-1]



(2022年 N=360、2019年 N=528)

システム担当者数[Q6-1]



(N=236)

○取組を総括できる人材／企画・導入・運用できる人材 [Q6-2] [Q6-3]

「デジタル化の取組を総括できる人材」と「ITツール・システムを企画・導入・運用できる人材」はともに、「確保できていない」が最も高く、次いで「自社には必要ない」、「ある程度確保できている」の順であった。

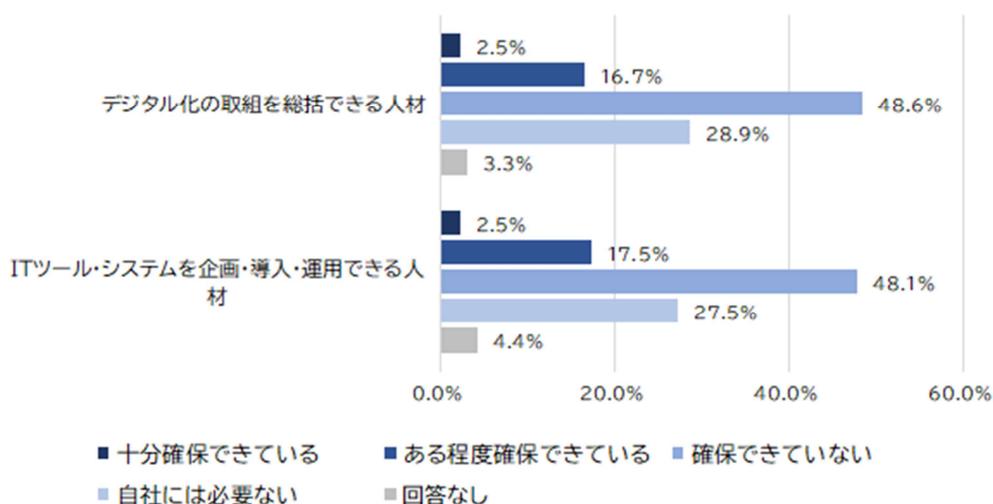
また、人材が確保できている場合の所属先は「経営層」、「その他営業部や製造部など」、「システム部門」の順で多かった。

【考察】

経済産業省が公表している「デジタルガバナンス・コード」では、組織づくり・人材・企業文化に関する方策として「経営者が自ら率先してDXを推進する姿勢を示したうえで、DX推進を主たる目的とする部署や担当者を明確にし、DX推進の観点からの部門横断的な権限を与える等、必要な体制を構築する」必要性を示している。

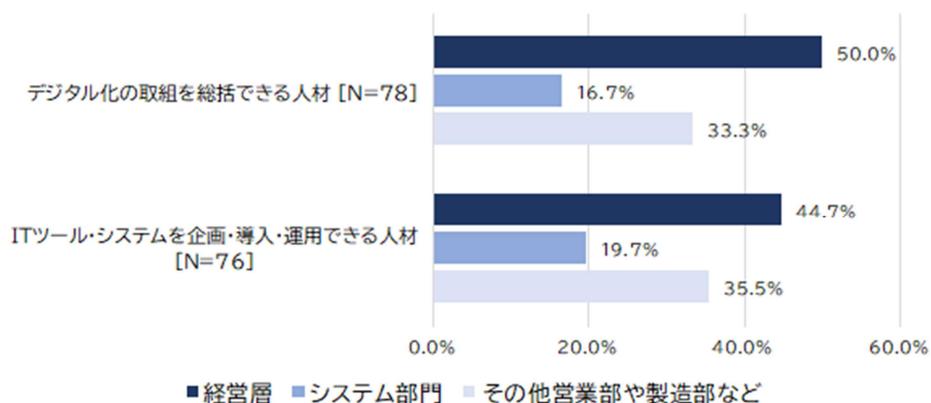
本設問は、人材確保の状況を確認するものであるが、「人材を確保できていない」企業が約5割の状況となっており、県内事業者においては、デジタル化やDXを推進するための体制が十分ではないことが示されている。

人材確保の状況[Q6-2/6-3]



(N=360)

人材の所属部署[Q6-2/6-3]

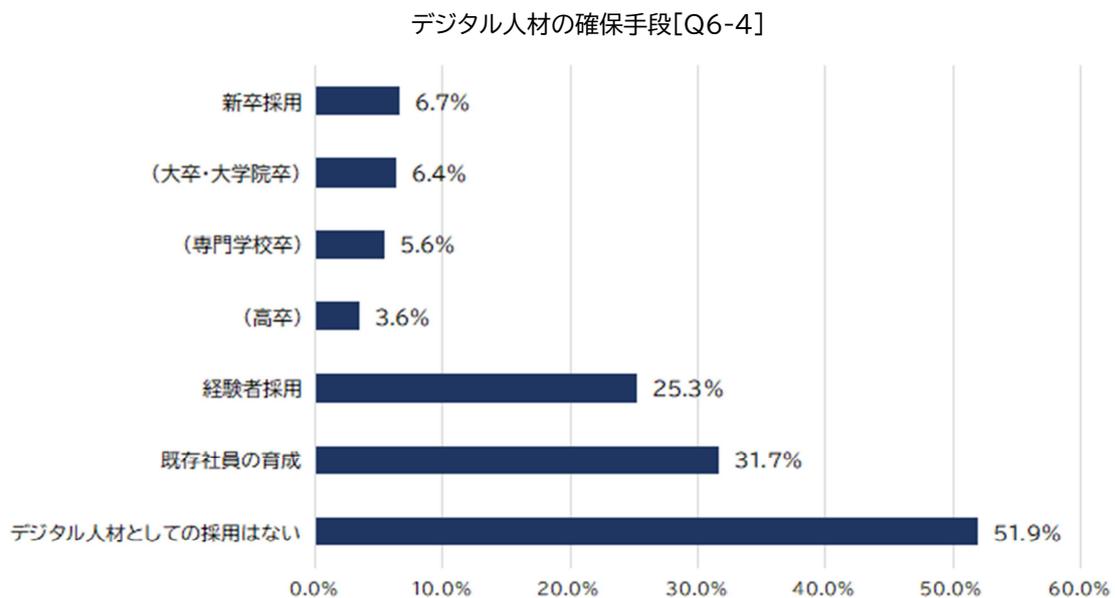


○デジタル人材の確保手段 [Q6-4]

「デジタル人材としての採用はない」が51.9%で最も高く、次いで「既存社員の育成」(31.7%)、「経験者採用」(25.3%)の順であった。

【考察】

Q6-1であったようにシステム部門などデジタル人材が専門職として配属される部署自体が設置されることが少ないため、「デジタル人材としての採用はない」という回答が過半数となったと推察できる。既存社員へデジタル技術についての育成を行っていくことが現実的であり、今後の課題となっている。



(N=360)

Q7 情報セキュリティ対策の状況

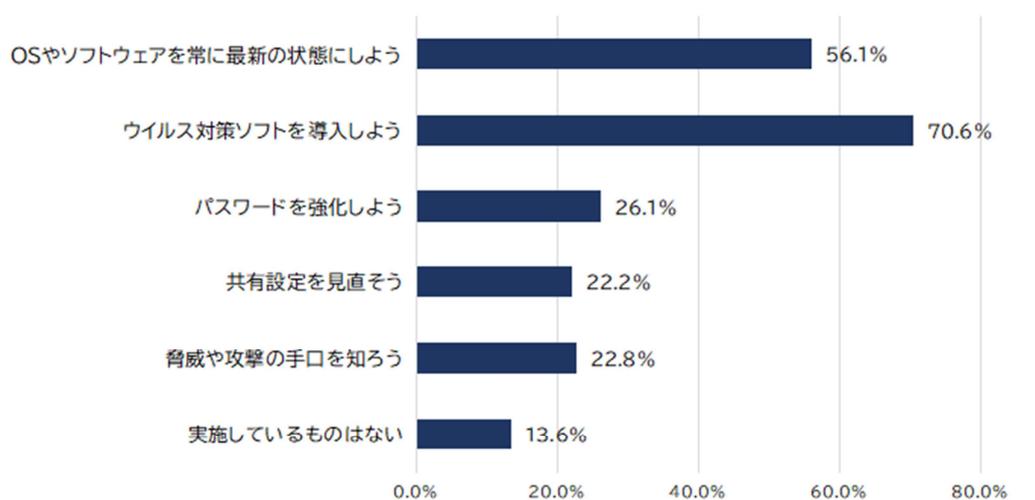
○IPA「情報セキュリティ5か条」の実施状況 [Q7-1]

「ウイルス対策ソフトを導入しよう」(70.6%)が最も高く、次いで「OSやソフトウェアを常に最新の状態にしよう」(56.1%)、「パスワードを強化しよう」(26.1%)の順であった。

【考察】

情報セキュリティ対策は、企業の大小問わず重要であるが、「情報セキュリティ5か条」は、IPAが「組織の規模を問わず必ず実行していただきたい重要な対策」として示しているものであり、各項目の実施率を高めていく必要がある。

IPA「情報セキュリティ5か条」の実施状況 [Q7-1]



(N=360)

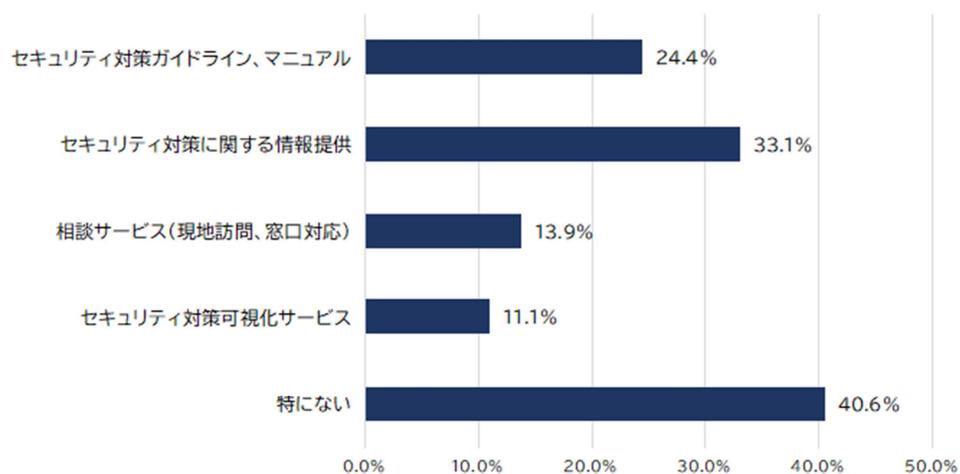
○関心があるセキュリティ対策サービス [Q7-2]

「特にない」(40.6%)が最も高く、次いで「セキュリティ対策に関する情報提供」(33.1%)、「セキュリティ対策ガイドライン、マニュアル」(24.4%)の順であった。

【考察】

現時点ではセキュリティ対策への関心が高い状態ではないが、デジタル技術活用上のリスクも明確に周知しつつ、セキュリティ対策の促進をしていくことが望まれる。周知にあたっては、Q9-1のとおり県内事業者の相談先として最も多い県内の情報関連企業と連携した取組も必要と考える。

関心があるセキュリティ対策のサービス[Q7-2]



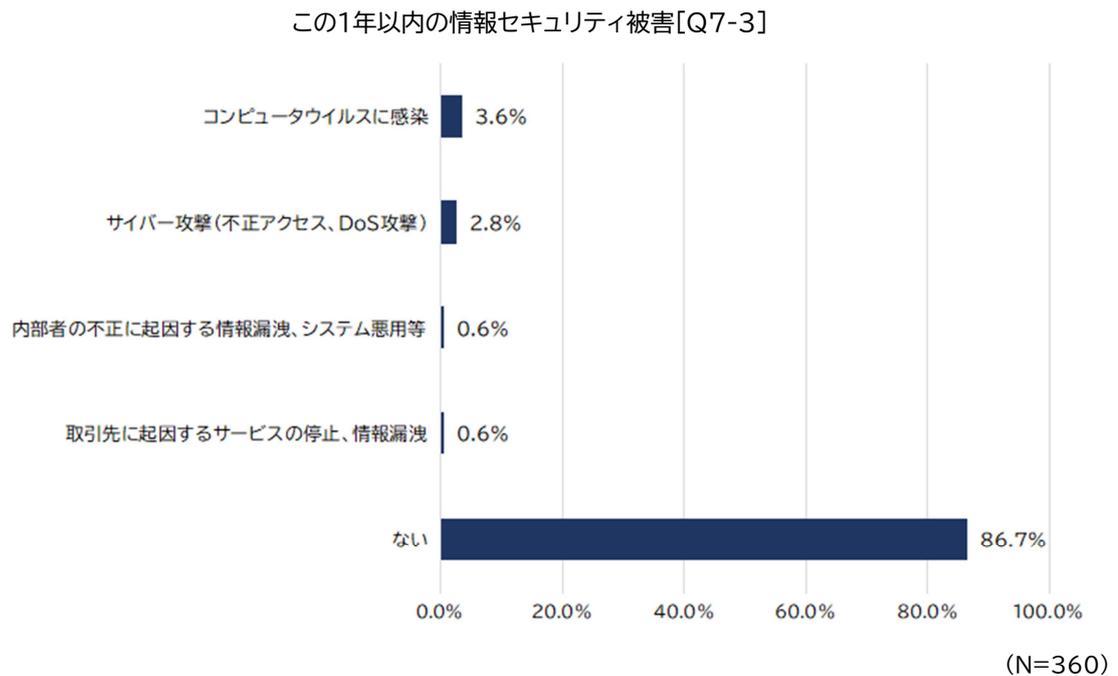
(N=360)

○この1年以内でのセキュリティ被害 [Q7-3]

「ない」が86.7%で最も高かった。

【考察】

被害に遭った事業者は数%であるが、この結果は、IPA（独立行政法人情報処理推進機構）による「2021年度 中小企業における情報セキュリティ対策に関する実態調査」の結果と同程度である。



Q8 電子契約への対応状況

○電子契約の導入状況 [Q8-1~2]

「導入していない（契約書に押印）」（66.9%）が最も高く、次いで「導入していない（押印、電子署名のどちらもせず、契約している）」（23.3%）、「導入している（電子ファイルに電子署名を付与）」（7.5%）の順であった。

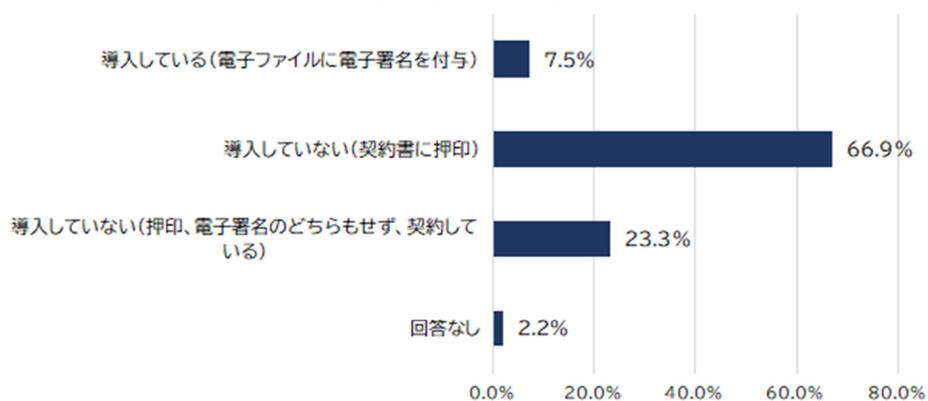
また、導入していない場合は、今後「必要と思うが取り組む予定はない」（25.6%）が最も高く、次いで「積極的に導入したい」（24.7%）、「必要とっていない」（18.9%）の順であった。

【考察】

6割以上の事業者が電子契約を導入しておらず、電子契約導入事業者は1割以内にとどまった。

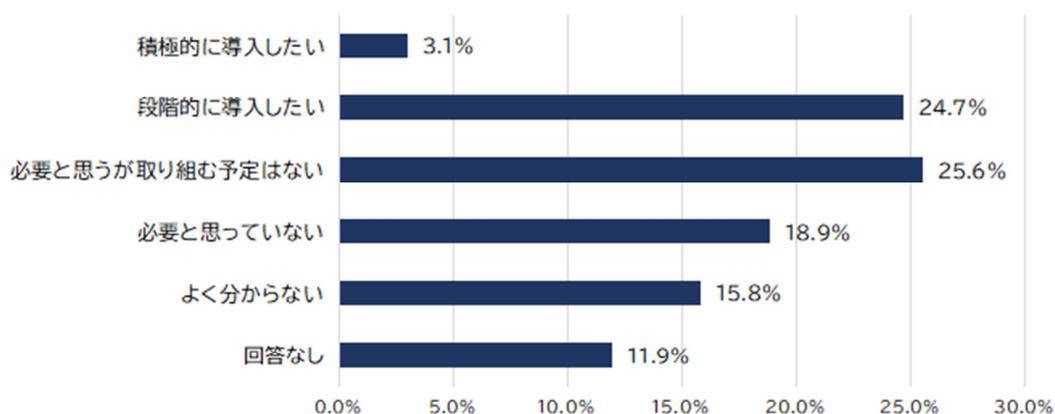
ただし、「段階的に導入したい」とする事業者が2割程度であり、電子契約への関心は一定程度あると考えられる。

電子契約の導入状況[Q8-1]



(N=360)

電子契約についての今後の考え[Q8-2]



(N=360)

Q9 デジタル技術活用に関する支援

○デジタル技術関連での相談者 [Q9-1]

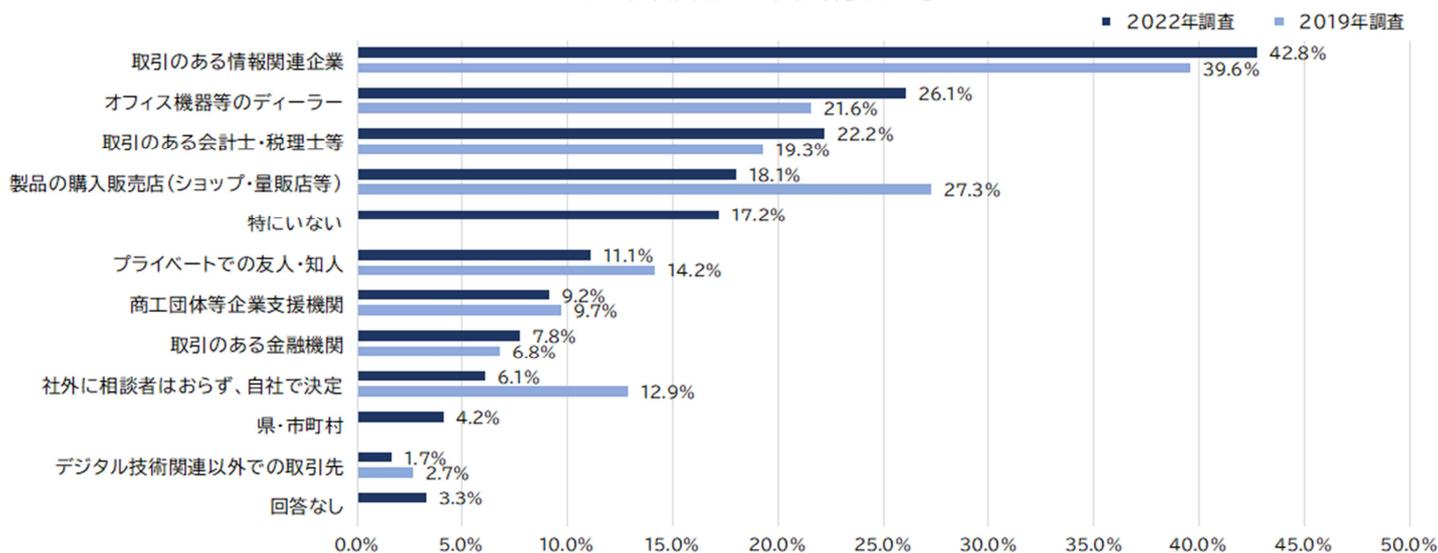
「取引のある情報関連企業」(42.8%)が最も高く、次いで「オフィス機器等のディーラー」(26.1%)、「取引のある会計士・税理士等」(22.2%)の順であった。

【考察】

デジタル技術関連での相談は取引のある情報関連企業をはじめ、事業者と直接的に接点ある関係者が多い。県としてDXやデジタル化を進めていく際には、事業者に対する直接的な支援に加え、情報関連企業やオフィス機器のディーラー等を通じて間接的に情報提供するなどの工夫が必要である。

また、「デジタル関連の相談者が特にいない」割合に地域差があることから、県は、各地域における地元の情報関連企業やオフィス機器のディーラーのほか、支援可能な県内企業のリストを作成するなど、積極的に相談対応をサポートしていく必要がある。

デジタル技術関連での相談者[Q9-1]



(2022年 N=360、2019年 N=528)

デジタル技術関連での相談者(地域別)[Q9-1]

| | 県北[83] | 県央[161] | 県南[116] |
|---------------------|--------|---------|---------|
| 取引のある情報関連企業 | 36.1% | 46.0% | 43.1% |
| オフィス機器等のディーラー | 19.3% | 28.0% | 28.4% |
| 取引のある会計士・税理士等 | 18.1% | 25.5% | 20.7% |
| 製品の購入販売店(ショップ・量販店等) | 12.0% | 19.3% | 20.7% |
| プライベートでの友人・知人 | 10.8% | 13.7% | 7.8% |
| 取引のある金融機関 | 7.2% | 9.9% | 5.2% |
| 商工団体等企業支援機関 | 10.8% | 7.5% | 10.3% |
| 社外に相談者はおらず、自社で決定 | 6.0% | 5.6% | 6.9% |
| 県・市町村 | 1.2% | 4.3% | 6.0% |
| デジタル技術関連以外での取引先 | 3.6% | 0.6% | 1.7% |
| 特にいない | 25.3% | 12.4% | 18.1% |

【その他回答】秋田県産業技術センター、グループ会社/親会社のシステム担当部署、コンサルタント会社、インターネット検索

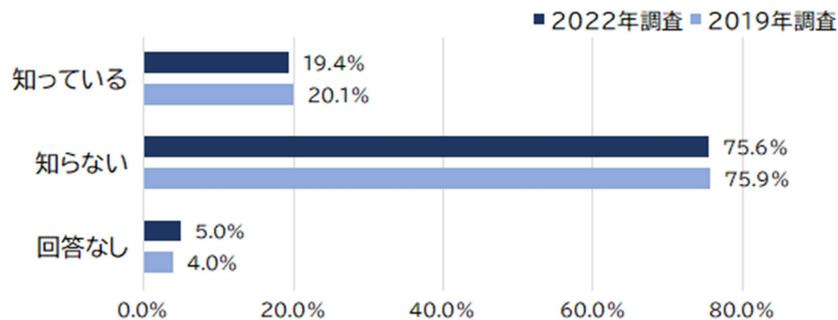
○県の支援制度 [Q9-2]

「知らない」が79.5%、「知っている」が20.5%であった。

【考察】

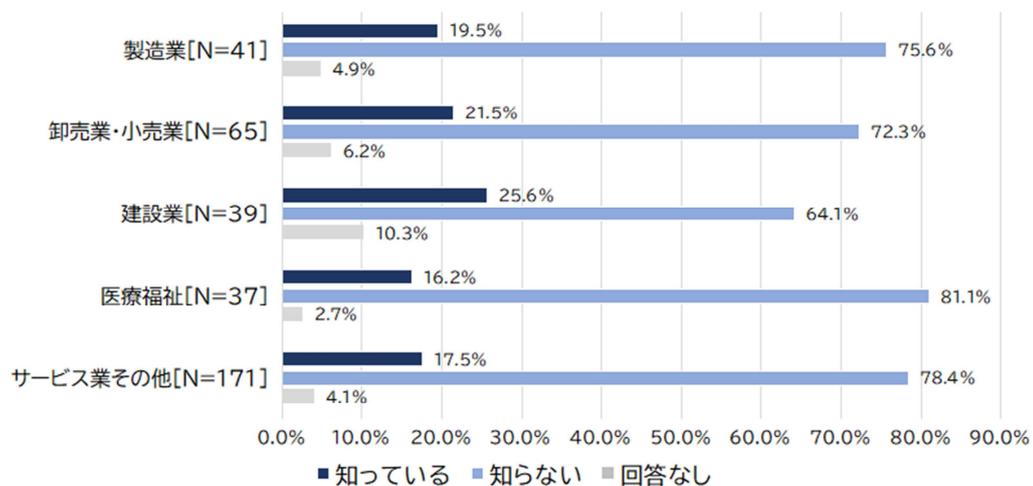
県のデジタル技術活用に関する支援制度の認知度は2割程度であった。Q9-1の回答結果を踏まえた間接的な情報発信等により、支援制度に関する更なる周知が必要である。

県によるデジタル技術活用に関する支援制度の認知度 [Q9-2]

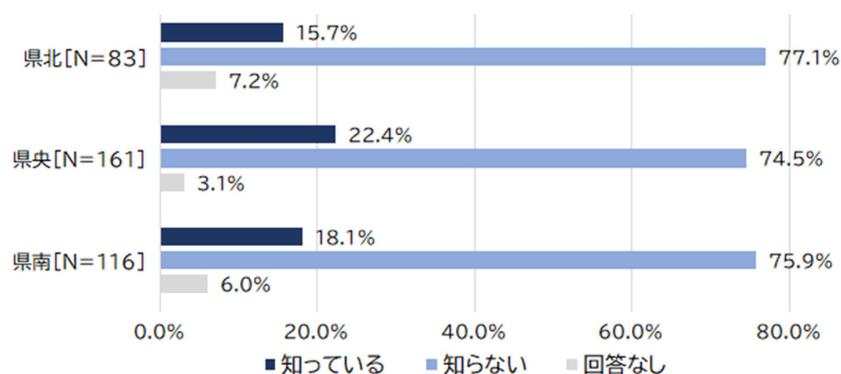


(2022年 N=360、2019年 N=528)

県によるデジタル技術活用に関する支援制度の認知度(業種別) [Q9-2]



県によるデジタル技術活用に関する支援制度の認知度(地域別) [Q9-2]



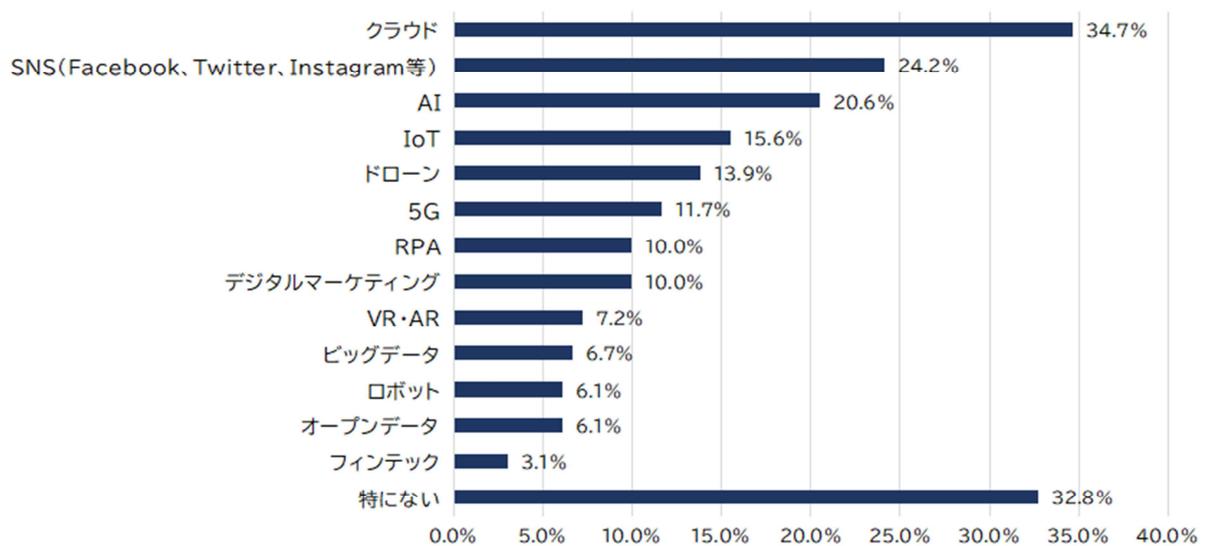
○デジタル技術活用で関心があるテーマ [Q9-3]

「クラウド」(34.7%) が最も高く、次いで「特にない」(32.8%)、「SNS (Facebook、Twitter、Instagram 等)」(24.2%) の順であった。

【考察】

「特にない」の回答結果が高いが、クラウドやSNS、AI等、関心の高いテーマについては、詳しい関心事項等をヒアリングしながら、Webサイトやメール、セミナー等で情報発信していくことが望ましい。

関心のあるテーマ[Q9-3]



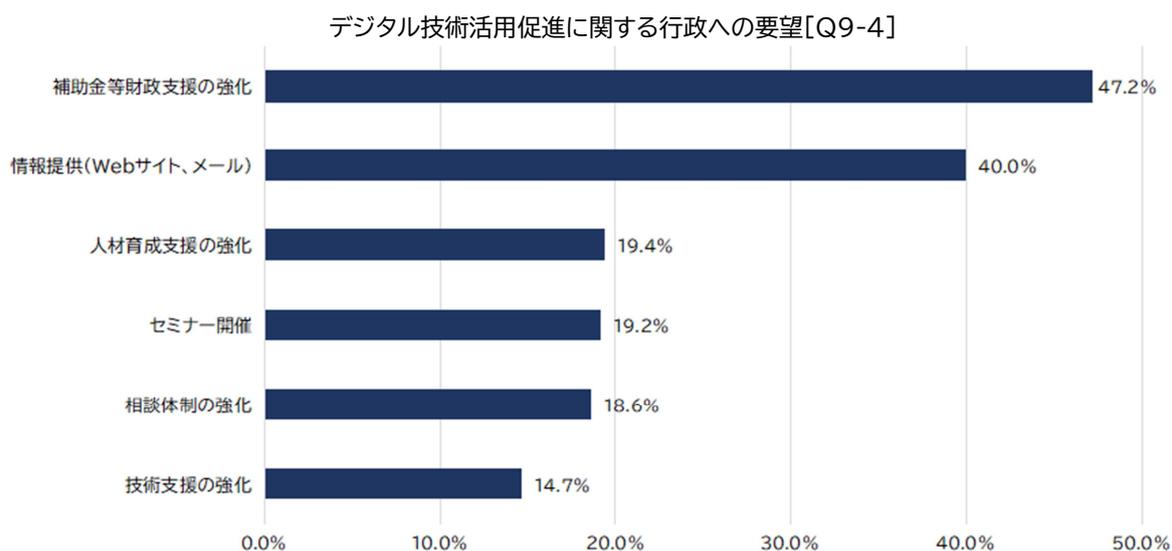
(N=360)

○行政への要望等 [Q9-4]

「補助金等財政支援の強化」(47.2%)が最も高く、次いで「情報提供(Webサイト、メール)」(40.0%)、「人材育成支援の強化」(19.4%)の順であった。

【考察】

デジタル技術の導入にあたっては費用面が最も問題として挙げられることが多かった(Q3-5)。それに関連して、行政には補助金等の支援に対する期待が大きいと推察される。同時に、情報提供やセミナー開催、相談体制、人材育成支援への期待も一定程度存在している。



(N=360)

【自由記載】※主な要望を抜粋(一部、表現を修正)

- ・ N A Sの導入を進められましたが、その料金が妥当なのかも分からない。中立な立場の相談できるところがあると助かる。
- ・ 中小企業で量産ではなく一品一様の製品製造が多い工場でもD Xを導入することで得られる働き方改革や生産性向上について、費用対効果と合わせて紹介してくれる機会があればと思っている。
- ・ セミナーだと触りしか話してもらえない場合が多いので、実際にソフトを使わせてもらうことができれば、導入のきっかけにはなると思う。
- ・ 補助金申請手続の簡略化を希望する。
- ・ 弊社の業務とデジタル技術がどのように関連するかがよくわからない。
- ・ 興味のあるデジタルツールでもその費用対効果やリスク等を知らないことが多くあり、導入検討にすら至らないものもある。
- ・ 今回のアンケートに同封されている案内を見て初めて知ったサイトもある。このような情報があるということをSNSやメディアで広く拡散して欲しい。

C 定性調査（ヒアリング調査）

1 ヒアリングの方針

アンケート調査の回答内容を定性的に捉えるため、次の点について各事業者や商工団体等の支援機関に対してヒアリングを実施した。

（ヒアリング項目）

- ・ デジタル技術の活用に対する満足度とその理由
- ・ 県外に発注する理由
- ・ A I 等の先進技術に関心はあるが活用できていない要因
- ・ D X について「必要と思うが取り組む予定はない」と考える理由
- ・ デジタル人材の育成の必要性と対応可否

2 ヒアリングの結果

ヒアリング項目に対する主な回答は、次のとおりであった。

① デジタル技術の活用に対する満足度とその理由

【主な回答】

- ・ デジタル化は、生産設備の導入に比べて効果が見えにくい。（製造業）
- ・ デジタル技術の導入効果を具体的に紹介してくれる機会があれば良いと思う。（製造業）
- ・ 普段の業務で手一杯であり、どのようなデジタル化の手段があり、どのくらい費用がかかるのか自分たちだけでは検討できないため諦めてしまう。そこを誰かがやってくれるのであればありがたい。（サービス業）
- ・ I T は、敷居が高いと思う。そのため、情報を調べても難しく断念する人も多い。より具体的に活用の仕方や効果を説明する必要がある。（小売業）
- ・ デジタル化は、あくまでも手段。事業者が抱える課題に対してどのようなツールがあるかであったり、県内の身近な事例を把握できると支援する際に助かる。（支援事業者）

【考察】

デジタル化における問題点として費用負担を挙げる事業者は多い。生産設備の増設に比べて、デジタル化は導入効果が伝わりにくい面もあることから、事業者の経営課題の解決に向けて、成果が出ている県内事業者等の具体的な事例を活用しながら、デジタル化を進める必要性や効果を上げるための工夫などを周知していく必要がある。

②県外に発注する理由

【主な回答】

- ・ 県内の情報関連企業が取り扱っている内容を知らない。どのような会社があり、何をできるか知らないのが大きいかと思う。例えば、Webサイトで「RPA」というキーワードで検索しても県外の事業者が出てくる。(小売業)
- ・ 以前、システムを導入した際は、東京の展示会で知った事業者にお願いした。秋田の企業をそのような場に行かせるのも手だと思う。また、県内でもそのような展示会を求めている企業は多いと思う。(小売業)

【考察】

身近な情報関連企業がデジタル化の相談者となっているという結果があったが、県内の情報関連企業のことを知らないという声もあった。

県では、令和4年に秋田県DX推進ポータルサイトを立ち上げ、県内情報関連企業の情報を掲載するなどPRを進めてきたが、更なる周知を行う必要がある。

③AI等の先進技術に関心はあるが活用できていない要因

【主な回答】

- ・ AIの導入を踏み切れないのは、AIを使いこなす人がいないため。Webサイトで検索する際も適したキーワードを入力しないと期待する検索結果にたどり着かないように、AIもキーワード(特徴量)の調整が必要。それをできる人材がない状況にあり、導入は簡単ではないと考えている。(製造業)
- ・ 自社のビジネスモデルと関わりのある技術は活用している。活用できていないとするのであれば、活用する必然性が明確でなかったり、そこに向かう投資判断がされていないということ。(小売業)

【考察】

AI等の先進技術はあくまでも手段の1つであるものの、解決手法を検討する際の選択肢の1つとしてAIで何ができるかを理解しておくことは重要である。

経済産業省では、「中小企業のAI活用を促進するためのAI導入ガイドブック」を公開している。県内でのAIの活用率が低い状況であるが、まずは、当該ガイドブックなどを活用しながら、AIのできることを事業者理解してもらうことが必要である。

[経済産業省AI導入ガイドブック]

https://www.meti.go.jp/policy/it_policy/jinzai/AIutilization.html

④DXについて「必要と思うが取り組む予定はない」と考える理由

【主な回答】

- ・ 個人でビジネスをしている上では、業務ソフトを利用しなくても問題ないので使っていない。(不動産業)
- ・ DXは、効果が分からないので進めるのが難しい。例えば、県が主導して数社を対象にコンサルティングする事業をやり、その効果を示してくれれば他の企業も取り組みやすいと思う。(製造業)
- ・ 公共事業の入札でデジタル化が加点要素になっており、そこに対応しなければ案件が取れない。特に国はICT施工を重視しており、建設業者はデジタル化に対応しなければいけない状況になっている。(建設業)
- ・ 現在、インボイス制度への対応が求められており、各社は経理関係のシステム改修や対応機器の導入が必要となる。インボイスのように強制力があると事業者は動くのではないかと。(小売業)

【考察】

物価高騰や人手不足への対応など企業経営における課題が山積する中で、国内外における競争力を高め経営を安定させていくとともに、デジタル技術の活用が当たり前になりつつある社会の潮流に対応していくためにはデジタル技術を効果的に活用していく必要がある。

県では、経営課題の解決にデジタル技術を活用する県内事業者が増えるよう、成果が出ている県内事業者等の具体的な事例を活用しながら、デジタル化を進める必要性や効果を上げるための工夫などを周知していくことが必要である。

⑤デジタル人材の育成の必要性と対応可否

【主な回答】

- ・ 人材の必要性は認識しているものの、絶対量が足りない。若いデジタルネイティブ世代の従業員にデジタル技術をインストールして順次会社をアップデートすることを考えている。(小売業)
- ・ デジタル技術を活用するにも、外部の意向に流されずに判断できる人材が不足している。(製造業)
- ・ 元エンジニアの社員が2人いる。その2人がWeb関連の開発を行っている。その社員がいるため、システム導入時にベンダーの言いなりにならず検討できる。(製造業)

【考察】

自社の課題解決に真に必要な解決手段を決めていくためには、自社に必要なことを理解し、外部業者等と会話できる人材が求められる。ヒアリング調査においてもデジタル人材が不足しているという話があることから、事業者のデジタル人材を育成するための支援が必要である。